ｃ.『熊本鎮台戦闘日記　附録』

本附録は『熊本鎮台戦闘日記』凡例に、「歩兵十四連隊（第一大隊左半大隊入城ス）、本城連絡前ハ各旅団ニ分属スルヲ以テ、別ニ十四連隊ノ戦闘日記ヲ編纂シ本台戦闘日記ノ附録トナス」とあり、十四連隊の小倉出発前の2月6日から熊本城入城4月15日までの各地の野戦での戦闘状況について記したものである。この中から小銃や弾薬についての主な記述を、日付順に抽出した。後装式のスナイドル銃への交換に歓喜したり、弾薬不足に苦悩する状況、戦闘の激しさから極めて多くの銃弾が使用されたであろうこと等がよくわかる。

なお、今回は刊本の續日本史籍協会叢書編、（財）東京大学出版会発行『熊本鎮台戦闘日記二』を主に使用し、便に供するため当該事項記載頁を末に付した。また、適宜、下関文書館発行『乃木大将所蔵西南戦争従軍日誌第十四連隊第二大隊』資料叢書25（以下、第二大隊日誌と記す）も用いた。

二月十八日

・小倉にある所の各隊出征準備、已に成ると雖も連日の風浪馬関の渡船を阻絶し、スナイトル銃弾の交換辨せざるを以て、徒らに日を曠して之を待てり。（p8）

・この日、乃木少佐は福岡県庁に渡辺県令に会し、地方の警備を協議しエンピール銃、このエンピール銃は従来第三大隊の携帯せしに出征につきスナイトルと交換し不要に属するを以てなり、の挌護を依頼す。（p8）

二月十九日

・小倉在營の各隊銃弾の交換未だ辨せずと雖も、徒らに軍機を誤るあらんを恐れ、午後に至り出発せしむ。（p10）

・各隊進むこと1時程にして馬関にあるの銃弾、到達するを以て急に多数の夫卒を使役し、第四中隊之を護送し疾駆して荒生田及び黒崎の両所に至りエンヒール銃弾と交換す。将卒歓喜の情思うべきなり。（p11）

・午後第2時小倉営所出発、同第3時（凡そ1里程）荒生田村に至る。同所携ふるところのエンビール銃をスナイドル銃と引替、同第7時同所を発し同第8時30分（凡そ3里程）筑前国黒崎驛に至り舍営す。（第二大隊日誌p1）

・第四中隊は特に連隊予備銃器弾薬の護送を命せられ、未だ発せす。（第二大隊日誌p2）

二月二十日

・第二大隊第四中隊は午後1時小倉を発し、小区隊に分割し運搬する予備銃弾の護送に充て、逐次に行進す。（P12）

・第四中隊は午後第1時小倉出発、小区隊に分ち運搬する所の銃器弾薬の護送に充て、以て逐次に発途、最後区隊の黒崎驛に達せしは第5時なり。（第二大隊日誌p2）

二月二十一日

・第二大隊第四中隊は午前6時黒崎を発し、昨日の如く銃弾を護衛して午後5時飯塚に至る。（P15）

・第四中隊は午前第6時黒崎を発し、同午後第5時飯塚へ至る。（第二大隊日誌p3）

二月二十二日

・第一大隊右半大隊は午前6時出発、府中を経て兼松に進み安藤副官に贏兵50余名を附し、南の関連隊本部に弾薬を受領し、之を山鹿へ護送するの目的を以て本道より進ましむ。（P16）

・沿道遅滞の兵漸次来り、集る者若くは7、8名、若くは10余名之を危薄の戦線に増加し、将校も或は傷者の銃を執て戦勢を助く。（P21）

・傷者弾糧は順次に運搬せしめ、残余の弾糧に火して烟焔の上るを期とし戦線を左右に開て退去し、千本桜の近傍に後拒を置て防戦地位を撰ぶべしと約す。（P22）

・第四中隊は午前第 5 時飯塚を発し、同第 11 時久留米に至る。（第二大隊日誌 p3）

二月二十三日

・此日、連隊は本部を木葉に置き器械弾薬等みな此に移し南の関又一物なし。故に安藤副官更に木葉に赴く。此地戦正に闌なり。故に率ゆる処の贏兵稍堪うべき者 20 余名を選び本道の戦線に増加して戦い、副官並に下士 1 名を傷く、此を以て今日弾薬を山鹿に輸送するを果さず。（p26）

・此日、第四中隊は久留米を発し途中植木駅の戦況を伝聞し、護送する銃弾を急進せしめたり。（p27）

・ここにおいて、互いに相持して動かざること数時、砲兵科古垣少尉、輜重科軍曹某東京より来る。乃ち少尉を本道に置て援隊増減の令を伝え、軍曹をして糧弾運搬の指揮を助力せしむ。（p29）

二月二十四日

・第一大隊右半隊は山鹿にあり、なお守勢を取り弾薬の到着を待つと雖も安藤副官未だ復命せざるを以て、早暁又丹羽下副官を遣り之を促す。此時連隊は木葉の戦い利あらず已に南関に退き、戦備を整うの際にして、僅かに弾薬 2 万発を受領し、又南関との間に廣野村に通ずる間道あり。（p36）

・本日午前 3 時、第二大隊第四中隊長石丸大尉部下を率い、銃器弾薬若干を護送し原町より南関に至る。（p37）

・本日午前第 3 時過ぎ、第四中隊其護衛する為の銃器弾薬と共に南の関に到着す。（第二大隊日誌 p5）

二月二十六日

・途上、賊の伏屍を検し遺棄せる弾薬匣等を閲するに、悉く加治木の士族に係る者なり。（p54）

・第三中隊にて本日銃及び刀剣、弾薬の分捕りあり。本日該隊にて、現に賊 10 余名を斃す。此に死する賊、加治木三番小隊某と記し、銃器はスナイトルを携帯せり。（第二大隊日誌 p7）

三月三日

・本日、銃器等の分捕あり。

・賊、銃器弾薬を棄てて走る。（第二大隊日誌 p13）

三月七日

・第一大隊右半大隊は岩村より南関に退き休養数日、初め同隊の久留米を発するや病兵若干を第二大隊に附従せしめる者、漸次快復或は該大隊に属して戦い、或は弾薬を護送して山鹿口に来り。（p76）

三月十五日

・第三大隊第一中隊は権現山にあり、第二中隊鉢割山の戦況は第二大隊の条に掲くるがごとし。而して分捕はエンピール銃 100 余挺、其他弾薬等夥し。（p89）

三月二十日

・我軍、破竹の勢に乗じ長躯して植木駅に達す。器械弾薬、賊の貯うる処のもの依然として山積せり。（p96）

三月二十一日

・午後、更に一半隊を以て植木に向い斥候を出す。宮永少尉試補、之を率い黄泉味取に達し、長駆直ちに植木の賊を横撃せんとす。偶、津下少佐の率いる諸隊此に来り、共に之に赴き会戦数刻を移す。遂に目的を達せず半夜味取に退く。この日傷者下士 2 名、兵卒 1 名。而して小銃 81 挺、弾薬 3 千発余、其他雑品数多を獲たり。（p98）

四月一日

・吉次越の険を抜く、午前 6 時止って此山を警備す。銃器刀剣及び雑品を捕獲する多し。（p114）

・此日の戦闘之に終る。当山警備の命あり、防御線を定め哨兵を配布し厳守す。分捕品銃器、刀剣及び雑品あり。又、死傷不少。（第二大隊日誌 p34）

d.「明治十年二月賊徒征討以来平定ニ至ル迠砲兵支廠兵器弾薬製造支給之景況」及び別冊「明治十一年三月明治十年中鹿児島征討ニ際シ兵器弾薬出納表　砲兵支廠」について

「明治十年二月賊徒征討以来平定ニ至ル迠砲兵支廠兵器弾薬製造支給之景況（以下、砲兵支廠兵器弾薬製造支給之景況という）」は、その名称のとおり、西南戦争時の大阪砲兵支廠における兵器や弾薬の製造及び支給の状況を簡潔に記したものである。

別冊「明治十一年三月明治十年中鹿児島征討ニ際シ兵器弾薬出納表砲兵支廠（以下、兵器弾薬出納表という）」はその詳細な出納表である。記された銃砲や弾薬の品目や数量と『征西戦記稿附表全』銃砲損廃表や弾薬消耗表とを突き合わせることで、戦地での銃砲や弾薬の消耗の実体がみえてくる。よって、比較表を付した。

(1)「砲兵支廠兵器弾薬製造支給之景況」の引用

明治十年二月四日、鹿児島属廠在勤火工下長江田兼親、及び傭い北條時義の両名、さきに一月二十三日をもって該の地へ差遣したる汽船赤龍丸号へ乗組、同廠より火薬弾薬若干を積み入れ押解として着阪し、一月三十日夜、属廠火薬庫強盗の景況容易ならざる旨、陸軍大尉新納軍八よりの届け書を持参し、且つ該の県下の現状をも具陳す。よって翌五日、副提理陸軍少佐井上教通、江田火工下長を引き連れ、西京陸軍卿の止宿に到り事実を上申す。

同六日、井上少佐帰阪、陸軍卿命あり。明七日、高雄艦鹿児島へ向け出帆に付、支廠官員の内一名乗組を為し、該の地へ差遣すべしと。即ち鞍工下長吉本義次をして属廠火薬製造差し留めの達し及び事情探偵の事等を含め出張申付、同人その夜出発す。同十四日、高雄艦鹿児島港に入ることを得ず、同人同艦より帰阪し艦上目撃する所、該の地の景況ますます切迫なるを云う。同十五日ごろ、西南容易ならざる形勢の旨、陸軍卿より御達の趣も之有りにより、諸兵器弾薬の整備を専らにし、且つ夜中は別に官員をして人夫20余名を率い、間断なく廠内周囲を巡邏せしめもって警戒を厳にす。是より大阪以西鎮台営所より兵器弾薬請求の電報日一日より多く、其れ20度より21、2度に及ぶこと数々にして返信、又之に称う。したがって製造の事業は益々人員を増し時間を加え、昼夜もって之に従事す。

同二十日、征討の命下る。この日、兵器弾薬運搬便宜の為、神戸へ支廠出張所を置き官員を派出し、もっぱら兵器弾薬運漕の事務を扱わしむ。同二十一日、井上少佐馬関出張仰付られ、ほか数名と共に出発す。それは同所において支給分配の事を取扱う為なり。ついで同所に砲兵部を置かる。井上少佐その外もまた軍団付となる。同二十七日、砲兵支廠当時の事業、事実皆戦地砲廠と同一般なるに付、伺の上支廠に限り従軍同様の心得をもって増俸を賜う。

六月十三日、賊徒豊後路へ廻出に付、兵器弾薬支給運搬便宜の為、伺を経て支廠出張所を馬関に置く。ここにおいて陸軍少佐佐々木直前、陸軍少尉土川定次郎、同村田祥之助の3名、当分支廠付仰付られ、同所へ出張その事務を担当せしむ。ついで同月二十五日、臼杵砲兵部へ合併す。

さて、二月より起こり九月平定に至るまで、兵器弾薬支給運搬及び製造修理、工廠の建設等事業最も多く忙しく、日もって夜に継ぐ。其の工廠仕業時間の如きは物品により異同ありといえども、概略1日平均13時間余、其の人員は同1,600人余、又兵器荷造等に役する人夫も同70人余、しかるに其の製作せし物品及び支給出納せしもの等は、別冊の通りに之有り。又、其の建築に係るものは火工所、スナイドル弾薬製造所及び器械の据付、兵器荷造場、小銃修理場等。その購求せるものはシャープス銃1,000挺、同弾薬100万発、弾薬盒共スナイドルドウス5百万発、スペンサー弾薬419万発等なり。

九月二十四日、賊徒平定。十月九日、本省より御達あり事務平常に復す。しかれども、なお戦地より繰り戻しの器械弾薬、陸続として日々回着し来たるをもって、其の神戸出張所の如きは十一月三十日に至り、初めて之を解く。

(2)「兵器弾薬出納表」について（後掲の比較表参照）

本表は32頁、39部、616品目にわたる多種多様で詳細な出納表である。表は品目、原数、製作数、合計、戦地への輸送数、差引現在、戦地よりの還納数、十二月三十一日合計、消耗及び廃棄の数の9項目からなる。消耗及び廃棄の数については、備考に「表中、朱書消耗及廃棄の数は当廠より戦地へ輸送した総数のうち、漸次軍団砲兵部より還納された数を差引き、不足分を消耗及び廃棄とみなしたもので、実際の戦地での消耗数、遺失数、廃却数などは、当廠でははっきりとはわからない」とあり、必ずしも実体を厳密に反映したものではないようだ。また、品目はあるものの戦地へ輸送されていないものが128品目あり、消耗及び廃棄がないものは242品目ある。当時の砲兵支廠における各種実体が垣間みえる重要な資料である。

部と品目数は表順では、四斤山砲之部84品目、四斤野砲之部50品目、山野用兼帯物品之部40品目、臼砲之部34品目、橋船野堡器械之部6品目、軍鞍之部39品目、遊鞍之部13品目、歩兵器之部52品目、砲歩火具之部38品目、クルップ野砲之部1品目、六斤ブロードウエル砲之部11品目、ブロードウエル山砲之部14品目、英式十二斤アルムストロンク之部1品目、英式一斤ウイツヲールト之部8品目、英式二斤ウイツヲールト之部1品目、十三拇臼砲之部3品目、二十拇臼砲之部2品目、銅製二十四斤砲之部4品目、銅製十八斤砲之部3品目、銅製十二斤砲之部3品目、ガツトリンク砲之部2品目、アルミニール銃之部6品目、ツンナール銃之部23品目、エンヒール騎銃之部5品目、モントストロン騎銃之部1品目、スペンセル銃之部9品目、レカルツ銃之部8品目、ウイルソンス銃之部1品目、シヤスホー銃之部2品目、シヤーフル銃之部6品目、管打スタール銃之部1品目、テレリー銃之部1品目、マルチニー銃之部1品目、ヒストル銃之部4品目、エンヒール属品之部5品目、砲兵弾薬盒之部5品目、雑品之部35品目、砲歩火具之部80品目、各種小銃実砲之部14品目である。

これらは、それぞれにまとめられてはいるが、山野用兼帯物品之部の中にスタール銃やエンフィールド銃剣、サーベル、砲兵喇叭などの兵卒装備品なども少なからず含まれており、銃砲ごとに検討するには少し整理した方がわかりやすい。

以下、名称は『図解古銃辞典』所荘吉、『武器と防具幕末編』幕末軍事史研究会、『西南戦争の弾薬小火器弾薬編』・『西南戦争の弾薬火砲弾薬編』全日本軍装研究会に倣う。部の名称には出てこない銃砲も品目から書き出した。

小　銃

小銃は計25種類がある。小銃の部にはアルミニー銃、ツンナール銃、エンフィールド騎銃、モントストロン（ストーム）騎銃、スペンサー銃、レカルツ銃、ウイルソンス銃、シャスポー銃、シャープス銃、管打スタール銃、テレリー銃、マルチニー銃の12部があり、ツンナール銃之部には長ツンナール銃、短ツンナール銃、鋸剣ツンナール銃、手違ツンナール銃の4種類、スペンサー銃之部には長スペンサー銃、短スペンサー銃の2種類、レカルツ銃之部には長レカルツ銃、短レカルツ銃の2種類、シャープス銃之部には管打長シャープス銃、針打長シャープス銃、管打短シャープス銃、針打短シャープス銃の4種類がある。長スナイドル銃、短スナイドル銃、長エンフィールド銃、短エンフィールド銃は歩兵器之部に、スタール銃は山野用兼帯物品之部に含まれている。

これらのうち、戦地へ輸送され消耗廃棄があるのは、短スナイドル銃、短エンフィールド銃、アルミニー銃、長ツンナール銃、短ツンナール銃、エンフィールド騎銃、長スペンサー銃、短レカルツ銃、針打短シャープス銃の9種類、戦地へ輸送されたが消耗廃棄がない小銃は、スタール銃、短スペンサー銃、シャスポー銃、マルチニー銃の4種類、戦地へ輸送されず消耗廃棄もないのは、長スナイドル銃、長エンフィールド銃、鋸剣ツンナール銃、手違ツンナール銃、モントストロン（ストーム）騎銃、長レカルツ銃、ウイルソンス銃、管打長シャープス銃、針打長シャープス銃、管打短シャープス銃、管打スタール銃、テレリー銃の12種類である。

以上の中で、戦地へ輸送された銃は戦闘で使用されたことが考えられ、13種類がある。

小銃弾　計 20 種類の弾薬がある。小銃弾も銃と同じく、スナイドル銃弾、エンフィールド銃弾、アルミニー銃弾、ツンナール銃弾、スペンサー銃弾、レカルツ銃弾、シャープス銃弾、スタール銃弾、シャスポー銃弾、マルチニー銃弾、モントストロン（ストーム）銃弾、ウイルソンス銃弾、ヘンリー銃弾の 13 種類があり、その中には実包、空砲、虚包に分かれるものもある。

雷管を除き消耗廃棄の数が多いのは順に、スナイドル銃弾、エンフィールド銃弾、ツンナール銃弾、シャープス銃弾の 4 種類で、これらが戦闘で主用されたことがうかがわれる。一方、マルチニー銃弾、モントストロン（ストーム）銃弾、スペンサー銃弾、レカルツ銃弾、ウイルソンス銃弾は消耗廃棄数が 0 発になっている。他の銃弾も前記 4 種類に比べれば、非常に少ない。

拳　銃

計 6 種類ある。ピストル之部は一発込ピストル銃のみで、他には山野用兼帯物品之部に中折二番形ピストル、蟹目一番形ピストル、蟹目二番形ピストル、蟹目一番十連ピストル、蟹目二番十連ピストルが記されている。最も数が多いのは中折二番形ピストルで、戦地へ輸送されず消耗廃棄もないのは一発込ピストル銃、蟹目一番十連ピストル、蟹目二番十連ピストルの 3 種類である。

拳銃弾　5 種類があるが、消耗廃棄の多い順に蟹目一番形ピストル銃弾、中折二番形ピストル銃弾、蟹目二番形ピストル銃弾で、一発込ピストル銃弾と手違ピストル銃弾は戦地へ輸送されず消耗廃棄もない。

大　砲

大砲の部には 15 部があり、16 種類が記載されている。砲が戦地へ輸送されたのは四斤山砲、四斤野砲、クルップ野砲、六斤ブロドウエル砲、ブロドウエル山砲、英式一斤ウイットウォース砲、十二拇臼砲、十三拇臼砲、二十拇臼砲の 9 種類で、これら以外では砲は送られていないものの、英式十二斤アームストロング砲はネジ回しのみ、英式二斤ウイットウォース砲は革水桶のみが輸送されている。銅製二十四斤砲、銅製十八斤砲、銅製十二斤砲は弾抜き、撞薬杖、洗箒杖などの属具が品目に上がっているが戦地には送られていない。さらには、ガトリング砲は砲も車台も送られていない。

大砲弾　火箭を含めて 48 種類がある。消耗廃棄数の多いものは四斤砲弾 8 種類と臼砲弾 8 種類で、これら以外は極めて少なくこの二種類でほとんどを占める。砲弾が輸送され消耗廃棄された種類として、砲が輸送された 9 種類以外では米式三インチ砲、ガトリング砲、英式六斤アームストロング砲、英式十二斤アームストロング砲、口込十一斤アームストロング砲などが挙げられているが、消耗廃棄数が極めて少なく戦闘で使用されたのか否か、発掘調査で出土する可能性等についてはさらなる検討が必要である。

付属具、工具、弾薬箱など

本表の 616 品目のうち、大砲や小銃、弾薬は計 120 品目で、残りの 500 品目ほどは軍装品、付属具や工具類である。遺物の主体を占める銃弾類は調査においても見落とすことはないが、付属具や工具類は調査においても遺物としての判別がつきにくく、不明鉄製品や不明品とされ、あるいは近年の製品として廃棄されるおそれもある。また、金属製品であれば現代まで残存している可能性は高いが、木材や革などの有機物は土中の遺物として残りにくく、戦闘後に採集されるなどしたものは現在では民具資料と誤認される可能性もある。実際に田原坂西南戦争資料館に寄贈された弾薬箱の中には、以前の所有者が大工道具箱として長年使用していたものがある。

なお、弾薬箱などの鉄製ネジ釘や真鍮製ネジ釘は今回報告の田原坂本道二ノ坂調査地、熊野座神社調査地、田原坂公園北半部調査地及び山頭遺跡 4 次調査地、玉東町二俣瓜生田官軍砲台跡、二俣古閑官軍砲台跡、横平山戦跡などで出土している。遺物としては銃弾類に次いで多く、出土遺跡も多い。他地域でも出土する可能性は高く、見落とさないように注意する必要がある。

消耗廃棄の数が一定数あるものは出土の可能性があるが、そもそも形状や用途が不明なままでは、判断できない。今後は、こうした方面の調査研究が必要になる。

大砲関連では車台、引枠、装杖、曳棒、照尺、弾薬箱などがある。大砲運搬や弾薬箱運搬のための荷馬用の鞍関係品も多く挙げられており、移動には不可欠の用品であったことが知られる。軍装品では銃剣や弾薬盒、負革、釣受金物などがある。釣受金物は山頭遺跡や熊本城、玉東町二俣古閑官軍砲台跡で出土している。

工具では機械函収入品として方頭槌、曳縄など、木工箱収入品として半円錐中小、釘剪など、縦木工箱収入品として木螺鑿、薄皮庖丁など、鉄工函として鉄小円杵、火釣など、鞴箱などがあるが、多くは消費廃棄数は少なく無いものもある。この中で方鋤、円鋤、丁字鍬などの農工具は比較的消費廃棄数は多く、調査で出土する可能性はある。こうした農工具は地域によって形態が異なり、他地域のものであればその形態から搬入品であることが判明するかもしれない。山頭遺跡の調査ではビワ尻肥後鍬先が出土し、その形態から地元品であることが分かった。

【参考】かな漢字文にはいくつかの文字抜けがあったので原本のカタカナ電文で補足し、漢数字は算用数字にした。
「弾薬概数括書」明治 10 年 10 月 26 日付　戊第千九百四十六号　廿六日午後四時達
第 3 局副長福原實大佐　→　陸軍卿官房長小澤武雄大佐
「砲兵本支廠より直に各隊へ渡せしスナイドル弾薬は 8,894,600、各旅団及各地砲廠より渡せし者 28,847,793、合せて 37,742,393。同じく銃は 16,143 挺。
エンフィールド弾薬、本支廠より直に渡せしは 9,408,927、各旅臺其他砲廠より渡せし者 3,788,400、合せて 13,197,327。同じく銃は 2,972 挺。
ツンナール弾薬、本支廠より直に渡せしもの 4,582,170、各旅団其地砲廠より渡したる者、1,860,802 発なり。合せて 6,442,972。同じく銃は 2,220 挺。四斤砲弾薬は、57,063 発なり。
右、最日を御申越遣拂員数の概略なり。右の他、弾薬戦地より帰りし分も連日の雨混の為め用立たざる分も、たぶんあるべし。未だ検査の暇あらず、かつ本支廠より送り出せしスナイドル弾薬総計は 4 千万発余なり。スナイドル銃は破損紛失の数は未だ目度立たずといえども、凡そ 3 万挺に至らんと想像せり。又各隊へ携帯せし内にも損銃あるべし。是も未だ相分からず。」（アジ歴 c09082328800）

『征西戦記稿附表全』「弾薬消耗表」と「砲兵支廠兵器弾薬出納表」及び「弾薬概数括書」の比較

小銃弾 弾薬種類	『征西戦記稿全』 弾薬消耗表 （単位：発）	砲兵支廠 兵器弾薬出納表 （単位：発）	明治 10 年 10 月 26 日付 「弾薬概数括書」（単位：発）		
	受数	戦地へ輸送数	砲兵本支廠より 各隊へ渡した数	各旅団、砲廠より 各隊へ渡した数	計
ｽﾅｲﾄﾞﾙ銃弾	34,632,830	41,629,457	8,894,600	28,847,793	37,742,393
ｴﾝﾌｨｰﾙﾄﾞ銃弾	19,530,850	21,369,039	9,408,927	3,788,400	13,197,327
ﾂﾝﾅｰﾙ銃弾	3,530,250	8,343,890	4,582,170	1,860,802	6,442,972
計	57,693,930	71,342,386	22,885,697	34,496,995	57,382,692

比較表凡例

・比較表の銃砲種類と弾薬種類は、各元表掲載の全種類を記した。
・比較表では、『征西戦記稿附表全』「銃砲損廃表」「弾薬消耗表」と兵器弾薬出納表と整合させるため、「銃砲損廃表」「弾薬消耗表」には記載がない「残数」を「受数」から「合計」を差し引いて記した。
・比較表は各元表の「受数」と「戦地へ輸送数」、「残数」と「戦地より還納数」、「合計（損廃数・消耗数）」と「消費及び廃棄数」がそれぞれ対応する。
・比較表は各元表記載の数を尊重しそのまま記した。ただし、内訳を再計算して相違がある場合は再計算した数値を（　）書きにした。
・比較表の残数にマイナス表記があるものは、受数より損廃数が多いことを示す。

「銃砲損廃表」備考欄には「受数ハ福岡及長崎軍団砲廠ニ於テ砲兵本支廠ヨリ受領ノ総額ナリ。損廃合計ノ員数、受数ヨリ超過スル者ハ蓋諸兵各自携帯ノ兵器ヨリ交換シテ増加シタル者ナラン」との記載がある。

同様に「弾薬消耗表」備考欄には、「受数ハ福岡及長崎軍団砲廠ニ於テ砲兵本支廠ヨリ受領セル者ト長崎ニテ製作シ若クハ外国ヨリ購買シテ長崎ニテ受領シタル総額ナリ。消耗合計ノ員数、受数ヨリ超過スル者ハ蓋諸兵各自携帯ノ弾薬アリシニ因ル」とある。

第 28 表　『征西戦記稿附表全』「銃砲損廃表」「弾薬消耗表」と「砲兵支廠兵器弾薬出納表」の比較表

【小銃】

銃砲損廃表（単位：挺）				兵器弾薬出納表（単位：挺）			
種類	受数	残数	損廃数	種類	戦地へ輸送数	戦地より還納数	消耗及び廃棄数
ｽﾅｲﾄﾞﾙ銃	8,287	−907	9,194	短ｽﾅｲﾄﾞﾙ銃	11,662	9,505	2,157
長ｽﾅｲﾄﾞﾙ銃	143	0	143	長ｽﾅｲﾄﾞﾙ銃	0	0	0
ｱﾙﾐﾆｰ銃	3,845	2,063	1,782	ｱﾙﾐﾆｰ銃	3,937	3,731	206
ｴﾝﾌｨｰﾙﾄﾞ銃	24,480	22,269	2,211	短ｴﾝﾌｨｰﾙﾄﾞ銃	25,302	23,626	1,676
				長ｴﾝﾌｨｰﾙﾄﾞ銃	0	0	0
				ｴﾝﾌｨｰﾙﾄﾞ騎銃	186	182	4
ﾂﾝﾅｰﾙ銃	3,533	−1,287	4,820	短ﾂﾝﾅｰﾙ銃	8,602	8,561	41
長ﾂﾝﾅｰﾙ銃	300	300	0	長ﾂﾝﾅｰﾙ銃	2,796	2,655	141
				鋸剣ﾂﾝﾅｰﾙ銃	0	0	0
				手違ﾂﾝﾅｰﾙ銃	0	0	0
ｼｬｰﾌﾟｽ銃	142	28	114	管打長ｼｬｰﾌﾟｽ銃	0	1	0（−1）
				針打長ｼｬｰﾌﾟｽ銃	0	2	0（−2）
				管打短ｼｬｰﾌﾟｽ銃	0	0	0
				針打短ｼｬｰﾌﾟｽ銃	868	862	6
短ｽﾍﾟﾝｻｰ銃	204	69	135	短ｽﾍﾟﾝｻｰ銃	644	644	0
長ｽﾍﾟﾝｻｰ銃	1,000	710	290	長ｽﾍﾟﾝｻｰ銃	1,821	1,800	21
ｽﾀｰﾙ銃	375	326	49	ｽﾀｰﾙ銃	1,040	1,040	0
				管打ｽﾀｰﾙ銃	0	54	0（−54）
ﾏﾙﾁﾈｰ銃	2,902	2,290	612	ﾏﾙﾁﾈｰ銃	2,502	2,502	0
短ﾚｶﾙﾂ銃	70	67	3	短ﾚｶﾙﾂ銃	194	137	57
				長ﾚｶﾙﾂ銃	0	0	0
				ﾓﾝﾄｽﾄﾛﾝ騎銃（ｽﾄｰﾑ）	0	0	0
				ｳｨﾙｿﾝｽ銃	0	0	0
				ｼｬｽﾎﾟｰ銃	6	6	0
				ﾃﾚﾘｰ銃	0	0	0
計 12 種	45,281	25,928	19,353	計 25 種	59,560	55,308	4,309(4,252)

【小銃弾】

弾薬消耗表（単位：発）				兵器弾薬出納表（単位：発）			
種類	受数	残数	消耗数	種類	戦地へ輸送数	戦地より還納数	消耗及び廃棄数
ｽﾅｲﾄﾞﾙ実包	34,632,830	8,487,792	26,145,038	良品ｽﾅｲﾄﾞﾙ実包	37,895,763	9,616,353	28,279,410
				演習用ｽﾅｲﾄﾞﾙ実包	3,725,945	1,451,231	2,274,714
				ｽﾅｲﾄﾞﾙ空包	15,000	15,000	0
				ｱﾙﾐﾆｰ実包	7,749	0	7,749
ｴﾝﾌｨｰﾙﾄﾞ実包	19,530,850	16,017,070	3,513,780	ｴﾝﾌｨｰﾙﾄﾞ実包	21,369,039	13,185,170	8,183,869
				ｴﾝﾌｨｰﾙﾄﾞ虚包	380,745	38,261	342,484
				雷管	256,428,468	158,222,040	98,206,428
ﾂﾝﾅｰﾙ実包	3,530,250	1,475,519	2,054,731	ﾂﾝﾅｰﾙ実包	8,343,890	2,563,507	5,780,383
				ﾂﾝﾅｰﾙ虚包	19,935	19,935	0
ｼｬｰﾌﾟｽ実包	1,153,680	873,180	280,500	ｼｬｰﾌﾟｽ実包	1,050,000	56	1,049,944
ｽﾍﾟﾝｻｰ実包	1,563,326	1,448,194	115,132	ｽﾍﾟﾝｻｰ実包	3,411,937	3,411,937	0
				鳥打ｽﾍﾟﾝｻｰ実包	7	0	7
ｽﾀｰﾙ実包	537,264	433,216	104,048	ｽﾀｰﾙ実包	750,718	739,424	11,294

弾薬消耗表（単位：発）				兵器弾薬出納表（単位：発）			
種類	受数	残数	消耗数	種類	戦地へ輸送数	戦地より還納数	消耗及び廃棄数
				ｽﾀｰﾙ虚包	1,584	0	1,584
ﾏﾙﾁﾈｰ実包	2,280,528	2,202,685	77,843	ﾏﾙﾁﾈｰ実包	2,150,849	2,150,849	0
ﾚｶﾙﾂ実包	65,000	65,000	0	ﾚｶﾙﾂ実包	257,960	257,960	0
				ﾓﾝﾄｽﾄﾛﾝ実包（ｽﾄｰﾑ）	0	50	0（−50）
				ｳｨﾙｿﾝｽ実包	0	50	0（−50）
				ｼｬｽﾎﾟｰ実包	10	0	10
				ﾍﾝﾘｰ実包	3	0	3
計 8 種	63,293,728	31,002,656	32,291,072	計 20 種	335,809,602	191,671,823	144,137,879 (144,137,779)

【拳銃】

銃砲損廃表（単位：挺）				兵器弾薬出納表（単位：挺）			
種類	受数	残数	損廃数	種類	戦地へ輸送数	戦地より還納数	消耗及び廃棄数
ﾋﾟｽﾄﾙ銃	440	50	390	中折二番形ﾋﾟｽﾄﾙ	566	454	112
				蟹目一番形ﾋﾟｽﾄﾙ	75	12	63
				蟹目二番形ﾋﾟｽﾄﾙ	7	1	6
				蟹目一番十連ﾋﾟｽﾄﾙ	0	0	0
				蟹目二番十連ﾋﾟｽﾄﾙ	0	0	0
				一発込ﾋﾟｽﾄﾙ銃	0	0	0
計 1 種	440	50	390	計 6 種	648	467	181

【拳銃弾】

弾薬消耗表（単位：発）				兵器弾薬出納表（単位：発）			
種類	受数	残数	消耗数	種類	戦地へ輸送数	戦地より還納数	消耗及び廃棄数
ﾋﾟｽﾄﾙ実包	27,159	−45,161	72,320	中折二番形ﾋﾟｽﾄﾙ実包	26,823	25,233	1,590
				蟹目一番形ﾋﾟｽﾄﾙ実包	6,490	726	5,764
				蟹目二番形ﾋﾟｽﾄﾙ実包	140	0	140
				一発込ﾋﾟｽﾄﾙ実包	0	0	0
				手違ﾋﾟｽﾄﾙ実包	0	0	0
計 1 種	27,159	−45,161	72,320	計 5 種	33,453	25,959	7,494

【大砲】

銃砲損廃表（単位：門）				兵器弾薬出納表（単位：門）			
種類	受数	残数	損廃数	種類	戦地へ輸送数	戦地より還納数	消耗及び廃棄数
四斤山砲	45	23	22（12）	四斤山砲	97	23	67（74）
四斤野砲	9	−3	12	四斤野砲	11	11	0
長四斤山砲	2	2	0				
ﾌﾞﾛｰﾄﾞｳｴﾙ山砲	6	4	2	六斤ﾌﾞﾛｰﾄﾞｳｴﾙ砲	2	2	0
				ﾌﾞﾛｰﾄﾞｳｴﾙ山砲（属具共）	12	12	0
				ﾌﾞﾛｰﾄﾞｳｴﾙ山砲	0	0	0
ｳｨｯﾄｳｫｰｽ砲	2	0	2	英式一斤ｳｨｯﾄｳｫｰｽ	2	1	1
				英式二斤ｳｨｯﾄｳｫｰｽ	革水桶 2	0	2
十二拇臼砲	4	−13	17	十二拇臼砲	5	4	1
二十拇臼砲	11	9	2	二十拇臼砲	9	8	1
十三拇臼砲	14	6	8	十三拇臼砲	22	1	21
ｸﾙｯﾌﾟ野砲	12	2	10	ｸﾙｯﾌﾟ野砲（属具共）	12	12	0
ｱｰﾑｽﾄﾛﾝｸﾞ砲	1	0	1	英式十二斤ｱｰﾑｽﾄﾛﾝｸﾞ	長形頭付螺廻 1	0	1
ｶﾞﾄﾘﾝｸﾞ砲	2	2	0	ｶﾞﾄﾘﾝｸﾞ砲（属具共）	0	0	0
ﾐﾄﾗｲｴｰｽ砲	1	1	0				
				銅製二十四斤砲	属具のみ 0	0	0
				銅製十八斤砲	属具のみ 0	0	0
				銅製十二斤砲	属具のみ 0	0	0
計 12 種	109	33	76(66)	計 16 種	172	74	91(98)

【大砲弾】

弾薬消耗表（単位：発）				兵器弾薬出納表（単位：発）			
種類	受数	残数	消耗数	種類	戦地へ輸送数	戦地より還納数	消耗及び廃棄数
四斤山砲弾薬	67,166	5,062	62,104	四斤榴弾	50,910	31,485	19,425
四斤野砲弾薬	1,000	−5,686	6,686	四斤榴霰弾	6,442	2,545	3,897
長四斤山砲弾薬	326	−579	905	四斤霰弾	5,129	5,129	0
				四斤山砲虚包	216	0	216
				四斤野砲虚包	114	0	114
				舶来四斤榴弾	849	0	849
				和製四斤榴弾	288	0	288
				舶来四斤散弾	120（110）	0	120（110）
ﾌﾞﾛｰﾄﾞｳｴﾙ砲弾薬	6,300	2,067	4,233	六斤ﾌﾞﾛｰﾄﾞｳｴﾙ榴弾	400	400	0
				ﾌﾞﾛｰﾄﾞｳｴﾙ山砲榴弾	8,200	8,200	0
ｳｨｯﾄｳｫｰｽ砲弾薬	2,439	0	2,439	英式一斤ｳｨｯﾄｳｫｰｽ実弾	154	0	2（154）
				英式二斤ｳｨｯﾄｳｫｰｽ榴弾	1	0	2（1）
				英式二斤ｳｨｯﾄｳｫｰｽ霰弾	1	0	1
十二拇臼砲弾薬	4,276	1,973	2,303	十二拇臼砲榴弾	1,694	1,694	0

弾薬消耗表（単位：発）				兵器弾薬出納表（単位：発）			
種類	受数	残数	消耗数	種類	戦地へ輸送数	戦地より還納数	消耗及び廃棄数
				十二拇臼砲焼弾	275	142	133
二十拇臼砲弾薬	2,786	1,355	1,431	二十拇臼砲榴弾	1,948	1,496	452
				二十拇臼砲焼弾	64	11	53
				二十拇臼砲光弾	1	0	1
十三拇臼砲弾薬	3,449	2,201	1,248	十三拇臼砲榴弾	1,718	510	1,208
				十三拇臼砲焼弾	182	50	132
ｸﾙｯﾌﾟ砲弾薬	6,499	5,857	642	ｸﾙｯﾌﾟ榴弾	7,501	7,501	0
ｱｰﾑｽﾄﾛﾝｸﾞ砲弾薬	300	257	43	英式十二斤 ｱｰﾑｽﾄﾛﾝｸﾞ榴弾	3	0	3
				英式十二斤 ｱｰﾑｽﾄﾛﾝｸﾞ榴霰弾	1	0	1
				口込十一斤 ｱｰﾑｽﾄﾛﾝｸﾞ榴霰弾	1	0	1
				英式六斤 ｱｰﾑｽﾄﾛﾝｸﾞ榴弾	300	300	0
				英式六斤 ｱｰﾑｽﾄﾛﾝｸﾞ榴霰弾	1	0	1
二十九拇臼砲弾薬	190	190	0	二十九拇臼砲榴弾	185	185	0
ｶﾞﾄﾘﾝｸﾞ砲弾薬	11,500	11,500	0	ｶﾞﾄﾘﾝｸﾞ弾薬	2	0	2
ﾐﾄﾗｲｴｰｽ砲弾薬	2,000	2,000	0				
				六斤 ﾌﾚﾂｹｰﾙ榴弾	1	0	1
				九斤 ﾌﾚﾂｹｰﾙ榴弾	1	0	1
				十二斤 ﾌﾚﾂｹｰﾙ榴弾	1	0	1
				十八斤 ﾌﾚﾂｹｰﾙ榴弾	1	0	1
				銅製二十四斤砲円実弾	0	0	0
				銅製二十四斤砲霰弾	0	0	0
				三十斤ﾊﾟﾙﾛｯﾄ榴弾	3	0	3
				ﾅﾎﾟﾚｵﾝ榴弾	1	0	1
				米式八拇榴弾	1	0	1
				米式六斤ﾗｲﾌﾙ着発弾	1	0	1
				米式施條砲光弾	0	0	0
				三ｲﾝﾁ六榴散弾	2	0	2
				米式三ｲﾝﾁ榴弾	1	0	1
				米式三ｲﾝﾁ榴霰弾	1	0	1
				米式三ｲﾝﾁ霰弾	1	0	1
				後装四ｲﾝﾁ半実弾	2	0	2
				三ｲﾝﾁ榴弾	2	0	2
				六斤円榴弾	68	0	68
				六斤円実弾	1	0	1
				火箭	596	196	0（400）
計 13 種	77,231	864	76,367	計 48 種	87,384	59,844	26,989 (27,530)

ｅ．各種記録類

各種記録類は、国立公文書館アジア歴史資料センター（以下アジ歴という）の「陸軍省大日記」と「海軍省公文備考」を使用した。検索条件は「弾薬」「スナイドル」「弾薬製造」「警視局　弾薬」「木葉砲廠」で、日時指定は基本的に明治10年１月から５月までの分を対象とし、適宜前後の時期の分も調査した。内容はスナイドル銃弾を主として、その他も含めて弾薬数量が具体的に記載されているものを主に抽出した。検索調査件数は333件で、そのうち主な100件を検索概要一覧とし、うち重要な17件についてはその読み下し文も付した。

時期は西南戦争「開戦前」「開戦後田原坂戦前まで」「田原坂戦中」「田原坂戦後熊本城開城まで」「熊本城開城後５月まで」の５期に分け、各期の銃弾の国内備蓄・新規製造・輸入も含めた概要を記し、概要一覧と読み下し文も各期ごとに並べた。これらは、主に田原坂調査で出土した小銃弾の供給元、各々の数量、種類の多さや消費の実体、それらが影響を与える戦闘状況の理解に資するためである。

(1) 各期の概要

開戦前　明治9年12月～明治10年2月18日

資料は警視局関連が多く、国内不平士族の争乱への対応が続いた警視局では、10年１月末の鹿児島私学校生徒による弾薬庫襲撃などもあって、弾薬調達を陸軍だけではなく海軍にも求めている。1月にはすでにスナイドル銃弾50万発の取り置きを陸軍に依頼し、2月になるとスナイドル銃と弾薬を購入し、陸軍から10万発、海軍からも2回に分けて計25万発を借り入れている。

本期の国内備蓄としては、陸軍では9年12月時点でエンフィールド銃弾は大阪・広島・熊本鎮台の計277万発あまり、在庫と合わせて総数720万発ほどである。また、2月には砲兵本廠保管の欧州輸入弾薬箱を500発入弾薬箱へ変更製作伺いがあり、その箱数からスナイドル銃弾に換算すると1,614万発に相当する。これがこの時点での砲兵本廠保管の弾数と推定される。新規製造では、陸軍省は2月13日に砲兵本廠から支廠へスナイドル銃弾の製造器械を送付したが、1日の生産能力6,000発の1基のみであった。

この段階ではエンフィールド銃は「新兵ノ演習」用として使用されていたようで、陸軍省から警視局へ貸し出していたものも返納されており、実戦での使用は想定されていなかったと考えられる。

開戦後田原坂戦前まで　2月19日～3月3日

西南戦争の開戦後、特に2月25日～27日の高瀬の戦いで1日あたりの消費弾薬量が想定を上回り、陸軍では砲兵本廠や支廠への弾薬製造の要求が増える。砲兵本支廠には多量の製造に伴う器械修理や材料の貯蔵もなく、海外への注文を求めるなど製造方も繁忙を極めたようだ。

陸軍より警視局への貸渡はスナイドル銃弾59万発、本廠から支廠への送付はスナイドル銃弾550万発、エンフィールド弾薬100万発、スペンサー弾薬50万発である。この段階までで砲兵本廠のスナイドル銃弾は累計620万発ほどが支出されている。

田原坂戦中　3月4日～3月20日

陸軍砲兵本廠から支廠へはスナイドル銃弾800万発ほどが、3月9日300万発、11日200万発、13日200万発ほど、17日100万発の4回に分けて送付され、他に50万発を海軍から借用している。これらは即座に戦地へ送られたとみられ、船便では横浜から神戸まで2～3日ほどの航海で神戸長崎博多間も同様、4月11日の記録だと神戸熊本長洲間は53時間ほどを要するとのことなので、こうすると本廠から戦地までは最短5日ほどで到着したと考えられ、本廠貯蔵分の銃弾が田原坂など熊本県北地域の戦場で使用された可能性は高い。この段階までで砲兵本廠のスナイドル銃弾は累計1,400万発ほどが支出されている。

川口武定著『従征日記』3月13日の項の第一旅団と第二旅団のスナイドル銃弾受払表では、3日から13日の間の田原坂の戦いの本街道と二俣口で消費された銃弾は合計1,482,080発との記録があり、一日当たりでは13万発余りとなる。14日頃には45万発ほどが田原口で消費され山鹿口でも同様に多いと、高瀬

の山縣有朋参軍から鳥尾小弥太中将あて知らせている。16 日には戦地の消費量が 1 日に 60 万発との報せが長崎から支廠にもたらされている。

このような消費弾薬の急増による製造の要求は砲兵本廠だけでは対応できず、支廠で本格的な製造を始めようとするが製造所はなく、3 月 7 日に支廠からその建築費用伺いを出している。20 日には鳥尾中将は山縣参軍に書して、弾薬残数はわずかに 10 日分のみで一挙進取か南関堅守の二途しか道はなく、このままでは弾薬の後継は困難とした。これに対し山縣参軍は現在は退守ではなく進撃あるのみとし、弾薬浪費を慎み製造と輸入を増やすよう指示している。この日は図らずも田原坂戦終了日であったが、この後も薩摩軍の猛攻を受け、銃弾不足の苦悩はしばらく続くことになる。

田原坂戦後熊本城開城まで　3 月 21 日～4 月 14 日

この時期の資料は多く、100 件のうち 45 件を占める。本廠から支廠へ送付のスナイドル銃弾は 3 月 21 日 450 万発、24 日演習用 120 万発、31 日 100 万発、4 月 11 日 60 万発の合計 730 万発で、累計 2,130 万発になる。この数字はさきに推定した本廠在庫 1,600 万発を大きく超過している。4 月 9 日には 100 万発を海軍から借用している。

4 月 4 日には既送の 400 万発のほか神戸大阪 340 万発、東京 100 万発、仙台青森 100 万発の合計 940 万発が続々と戦地へ送られたが、これ以外は日々製造できるほかスナイドル銃弾はなく、貯蔵分を撃ち尽くせば後継する銃弾はないと山縣参軍に連絡されており、この段階ではすでに本廠や支廠のスナイドル銃弾の在庫分はほとんど払底していたことが考えられる。また、4 月初旬からは水戸城仮火薬庫、第一方面、近衛局、東京鎮台、青山火薬所、名古屋鎮台金沢営所などの貯蔵分の銃器やエンフィールド弾薬も含めた弾薬類がすべて砲兵本廠や支廠に送付された。

この頃には主用銃のスナイドル銃やエンフィールド銃の銃砲と弾薬の不足はかなり深刻だったようで、各地に貯蔵されていた銃砲や銃弾もかき集められて戦地へ送られ、スペンサー銃、ツンナール銃、海軍から借用のマルチニー銃、マンソー銃、レカルツ銃などの各種の小銃も戦地に投入され、弾薬も製造されている。3 月 24 日に山縣参軍は各旅団へスナイドル弾薬の浪費を慎むよう告諭した。

外国からの買入は 4 月 4 日に 81,000 発が支那地方から船積みされた他、同 13 日には 260 万発 20 日以内、500 万発 70 日以内、1,000 万発 100 日以内の計 1,760 万発が長崎達する筈との資料がある。製造が困難というスナイドル空薬筒の外国発注は部品を含めて、3 月 24 日材料、4 月 8 日に 500 万個、11 日に 450 万個の計 950 万個が注文されている。

熊本城開城後 5 月まで　4 月 15 日～5 月

4 月 14 日の熊本城開城後は、砲兵本廠から送付のスナイドル銃弾は 22 日 60 万発、24 日 60 万発の計 120 万発。本廠のスナイドル弾薬製造は 4 月 21 日時点で 1 日半に 5 万発、職工数百人で昼夜間断無く徹夜点燈で製造している。5 月 15 日になると支廠貯蔵分は殆んど払底し、支廠で製造すれども戦地 1 日の消耗を補うには 10 日分の製造量でも足りず、戦地から請求があっても応じる弾はなく実に危殆の至り、と切迫した様子が記されている。これからすると支廠での製造量は 1 日当たり 3 ～ 4 万発程度だったかと考えられる。製造は工場で機械を使用していたとはいえ、実態は 1 点ずつの手作り状態だったことが後掲の『火工教程』に記載されている。

5 月になっても山縣参軍からは弾薬不足の懸念がたびたび伝えられ、6 日には製造数と在庫数を知らせるよう西郷中将から井田少将あてに令されている。18 日には西郷中将から 1 日にスナイドル弾薬 20 万発、エンフィールド弾薬 15 万発を生産できるように至急着手すべしとの命が出され、さらに 27 日には山縣参軍は西郷中将へ、弾薬量の質問に対する回答を催促している。一方、戦地の第二旅団砲廠の山根中尉は、19 日に「スナイドル弾薬は無数にして充分なり」と報告している。

本期では海外からの輸入の記事が多く、実包だけでなく 5 月半ばの部品調達など 25 件のうち 8 件があ

る。発注先は支那地方、天津、香港、欧州、英国、ドイツなどが見え、この頃には明治4年に敷設された長崎上海間の海底電信ケーブルによって連絡がとられていたと思われる。4月から5月にかけては外国からのスナイドル弾薬が徐々に到着するようになったが、5月9日時点で計数十万発ほどしかなく、特に欧州からは時間がかかり到着は6～7月頃の予定になっている。この頃は前期の分と合わせて上海などから400万発以上、欧州英国から800万発の計1,200万発以上が輸入されたようだ。

以上を通覧すると、5月に入ってもスナイドル弾薬不足に対する危機感は全く薄らいでおらず、銃弾不足への切迫感は上層部ほど非常に強く、陸海軍だけでなく大蔵省や工部省など明治政府挙げての総力戦が継続している状況が見てとれる。

検索概要一覧凡例

・検索概要一覧の件名は原資料に件名が付されているものはその件名を記し、件名が付されていない場合にはアジ歴検索時の件名を記したが、内容によっては分かりやすいものに修正したものもある。
・日付は基本的に発信日と返信日を記した。
・発着信欄は左が発信者、右が着信者で、照会回答の双方のやり取りの文書があるものは「⇔」とし、発信者側の照会依頼文書のみの場合には「→」、着信側の回答文書のみの場合には「←」で示した。
・アジ歴レファレンスコードが複数あるものは、資料が複数あるいは発着信毎の資料である。
・検索項目キーワードで抽出し内容や日付が不分名な場合、「簿冊」などで調べたものもある。
・警視局から海軍省への弾薬譲渡依頼については、戦争開始前後の弾薬不足の懸念による依頼返答のやり取りが頻繁に行われ、数量を把握しにくかったため海軍省の支出届なども確認した。
・陸軍省の外部との交渉においての、陸軍内部の事務文書は基本的に省略した。
・読み下し文ではカタカナはひらがなに、旧字は新字に、判別不明文字は「□」で示した。原本は縦書きである。

第29表　検索概要一覧

【開戦前】（明治9年12月～明治10年2月18日）

No.	発信日 返信日	発信		着信	件名と概要	主なアジ歴 レファレンスコード
1	M9. 12/27 M10. 1/29	砲兵支廠提理 御用取計 陸軍中佐 関迪教	⇔	陸軍卿 山縣有朋	**弾薬費をもって建築費に流用の件伺** 各鎮台へスナイドル・アルミニー銃配布の達しにつき、今よりエンフィールド銃弾薬製造を止め、その弾薬費の残金で火工所、又は反射炉の建築伺。現在エンフィールド弾薬は大阪・広島・熊本鎮台合計約280万発、在庫を合わせると約720万発である。 →読み下し①	C04027350000
2	― 1/22	警視局	←	陸軍大佐 小澤武雄	**警視局へスナイドル銃御買上云々回答** 警視局の非常用として砲兵本廠製造弾薬50万発取置依頼の件は、陸軍省においても全国常備兵へのスナイドル銃も未だ行き届かないため応じ難いが、非常の際は精々繰りあわせて用立てる。	C04027536800 C04027536900
3	― 2/7	内務卿 大久保利通	←	陸軍少輔 大山巌	**内務省へ旧警視庁において買入銃に付懸合** 旧警視庁買入分スナイドル銃2,160挺、弾薬20万発の引渡依頼の件は、砲兵本廠で調査の上、警視局へ戻す。従来渡し置きのエンフィールド銃の内2千挺の返納は受取る。	C04027544000 C04027544100
4	2/12 2/13	第三局長代理 陸軍大佐 福原實	⇔	陸軍卿代理 陸軍少輔 大山巌	**スナイドル弾薬箱製造致度候に付伺** 現在ある欧州より輸入した弾薬箱は、千発入または2千発入で重量もかさみ運送の際も不便なため、500発入の箱に変更製作したい。その数32,280個、代価13,331円64銭の製作費伺。 2/13回答…伺のとおり。	C04027169700

No.	発信日 返信日	発信		着信	件名と概要	主なｱｼﾞ歴 ﾚﾌｧﾚﾝｽｺｰﾄﾞ
5	2/13 2/13	第三局長代理 陸軍大佐 福原實	⇔	陸軍卿代理 陸軍少輔 大山巌	**スナイドル弾製造器械、砲兵支廠へ御備附の義伺** 東京砲兵本廠備付の1基（1日6千発製造）を至急大阪砲兵支廠へ送達伺。同日回答…伺のとおり。	C04027170100 C04027360800
6	2/13 2/13	大警視 川路利良	⇔	海軍大輔代理 海軍少将 中牟田倉之助	**無号 巡査用スナイドル弾薬44万発借受の件** **警視局照会** 非常戒厳につき44万発、代価をもって貸渡願いたい。同日海軍省回答…海軍省も充分の貯蓄も無く応じ難く、10万発だけ現納償還をもって貸渡す。	C09112354900 C09100112000
7	― 2/13	大警視 川路利良	←	陸軍大佐 小沢武雄	**警視局へ弾薬の儀回答** 警視局より熊本、長崎、佐賀、福岡等の地方へ巡査出張の際、スナイドル弾薬不足時の最寄鎮台へ掛合依頼の件は、スナイドル弾薬は各鎮台に兵備の他には渡してはないので応じ難い。	C04027547000
8	― 2/14	大警視 川路利良	←	陸軍大佐 小沢武雄	**警視局へ弾薬渡方通知** 昨13日問い合わせの件は、スナイドル銃1挺に付およそ100発、総計実包10万5千発、砲兵本廠より受取の事。ただし、実包は舶来品だが極善良品というわけではないので、御承知願いたい。 →読み下し②	C04027547600 C04027547700
9	2/15 2/17	大警視 川路利良	⇔	海軍大輔代理 海軍少将 中牟田倉之助	**弾薬貸渡の件、さらに警視局より依頼** スナイドル弾薬10万発、確かに受取った。しかし、昨今の形勢につき、弾薬不足の時は最寄の出張所へ依頼したい。2/17海軍省回答…時変の折は海軍兵器局より15万発の貸渡は差支えない。至急依頼の時は長崎出張所から5万発は貸渡す。長崎出張所の貯蔵は15万発である。	C09100112000

【開戦後 田原坂の戦い前まで】（2月19日～3月3日）

No.	発信日 返信日	発信		着信	件名と概要	主なｱｼﾞ歴 ﾚﾌｧﾚﾝｽｺｰﾄﾞ
10	― 2/19	大警視 川路利良	←	陸軍大佐 小沢武雄	**警視局へ弾薬貸渡し回答** スナイドル弾薬40万発貸渡掛合の件、陸軍省は十分な貯蓄は無いので差当り30万発だけ、代価をもって砲兵本廠より貸渡す。	C04027551200 C04027551300
11	2/20 ―	大警視 川路利良	→	陸軍少輔 大山巌	**警視局よりスナイドル弾薬貸渡の依頼** 30万発の内、20万発は出張する巡査へ渡し、10万発は先発の巡査へ送った。しかし、1人200発宛にはならないので、更に10万発を依頼したい。	C04026912800
12	― 2/21	大警視 川路利良	←	陸軍中佐 渡辺央	**警視局へスナイドル弾薬追加貸渡回答** 追加の10万発は代価をもって貸渡を承知したので、砲兵本廠より受取の事。	C04027552600
13	2/22 ―	陸軍卿代理 陸軍少輔 大山巌	→	砲兵本廠	**スナイドル弾薬100万発、支廠へ送達可致旨達** 砲兵本廠から砲兵支廠へ至急送達の事。	C04027362900

No.	発信日 返信日	発信		着信	件名と概要	主なｱｼﾞ歴 ﾚﾌｧﾚﾝｽｺｰﾄﾞ
14	2/22 2/24	大警視 川路利良	⇔	海軍少将 中牟田倉之助	**スナイドル弾薬貸渡の件、回答** 去る15日の追加依頼について、長崎出張所でスナイドル弾薬9万発を警視局出張警視官へ本日貸渡す。ついては長崎出張所以外に弾薬の予備はなく、かつ同出張所でも最早差繰は難しいが、海軍省であと6万発だけは用立てる。いずれも代価をもって貸渡す。 2/24警視局より追加の6万発を至急貸渡願いたい。同日海軍省回答…弾薬6万発、即兵器局より貸渡すので受取られたい。	C09100112000 C06090550000 C09100118600
15	2/24 ? —	陸軍卿代理 大山少輔	→	砲兵支廠	**本廠より支廠へエンフィールド銃等、可受取旨達** エンフィールド銃5千挺、同弾薬100万発、スナイドル弾薬製造用材料5千発分、ピストル銃75挺、同弾薬1,500発、隻眼鏡15台、ヤルト鏡22台を受取の事。	C04027363200
16	2/25 2/25	大警視 川路利良	⇔	陸軍中将 西郷従道	**警視局よりスナイドル弾薬30万発貸渡の件照会** 巡査出張先より弾薬不足急報につき、至急30万発だけ運送したいが、過日貸渡分は出張巡査へ悉く送り、いま当局に貯蔵無く甚だ切迫している。御瞭察のうえ依頼の数だけは急ぎ貸渡願いたい。同日陸軍省回答…当省貯蔵も充分に無く、差繰15万発を代価をもって貸渡すので、砲兵本廠より受取の事。	C04026913500 C04027554900
17	2/25 2/26	砲兵本廠提理 陸軍大佐 大築尚志	⇔	陸軍中将 西郷従道	**スナイドル弾至急製造方に付て、金額御渡の儀に付伺** これまで御達の弾薬の製造は終わったので、警視局へ貸渡す40万発を準備していた所、急きょ弾薬追加製造の電報あり。費用は100万発につき2万3千円程かかるので製造数をご指示願う。なお海外購求の品もあって注文の都合もあり、概数だけでもご指示を乞う。2/26回答…500万発製造致す事。 →読み下し③	C04027363900
18	2/25 3/4	砲兵支廠提理 御用取計兼勤 陸軍中佐 関迪教	⇔	陸軍中将 鳥尾小弥太	**スナイドル弾薬製造に付、材料買上費御渡の義に付伺** 砲兵支廠へ御渡しの弾薬製造器械据付出来次第、製造に着手したいが、材料貯蔵無く、まず500万発製造分の材料買上費、金5万円の御渡し伺。 3/4回答…伺のとおり。	C09081818000
19	2/25 2/25	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**小銃弾薬、砲兵支廠へ御備附相成度伺** スナイドル弾薬450万発、スペンサー弾薬50万発、砲兵本廠貯蔵分を支廠へ送達伺。同日回答…伺のとおり。	C04027178300
20	2/28 —	(砲兵支廠) 関中佐 大阪高麗橋 局発	→	陸軍参謀部 神戸分局着	**スナイドル弾薬500万発、砲兵本廠より来る筈** **午後9時15分発電報** この分敦賀丸で御取寄下さい。午後9時30分着	C09081759200
21	— 3/2	内務省警視局	←	陸軍中佐 渡辺央	**内務省警視局へスナイドル銃弾薬4万発可渡旨回答** 巡査200名出張につき、非常用弾薬送致依頼の件は、1人200発宛の割合で計4万発を代価をもって貸渡すので、直に砲兵本廠と打合せ受取る事。	C04027558100 C04027376500

【田原坂の戦い】（3 月 4 日～ 3 月 20 日）

No.	発信日 返信日	発信		着信	件 名 と 概 要	主なｱｼﾞ歴 ﾚﾌｧﾚﾝｽｺｰﾄﾞ
22	3/7 3/14	砲兵支廠提理 御用取計兼勤 陸軍中佐 関迪教	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**スナイドル弾薬製造所其の他建築費及び器械修理費御渡之義に付伺** 砲兵本廠より支廠へ製造器械送達に付、弾薬製造所、鉛熔弾所、雷管製造所、粉剤調合所建築及び火工器械補欠ならびに修理に着手のため費用 3 千円お渡し伺。3/14 回答…伺のとおり。	C04027378800
23	3/9 3/9	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**スナイドル弾薬、砲兵支廠へ送附之儀に付伺** 実包 300 万発、砲兵本廠貯蔵分を支廠へ送付の事。同日回答…伺のとおり。	C04027194600
24	3/11 3/11	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**スナイドル弾薬、砲兵支廠へ送附の義に付伺** 実包 200 万発、砲兵本廠貯蔵分を支廠へ送付の事。同日回答…伺のとおり。	C04027195900
25	― 3/13	鳥尾中将 神戸分局着	←	西郷中将 東京発	**16 日下士卒 420 名差出過刻申越の中隊も差出　午前 2 時 5 分発電報** 来る 16 日、敦賀丸にて下士卒に銃器を持たせ差出すほかに、依頼の 1 個中隊も差出す。ほかにスナイドル弾薬、数百万発を送る。午前 2 時 40 分着→読み下し④	C09081893400
26	3/16 3/17	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**スナイドル弾薬 100 万発、砲兵支廠へ送附の義伺** 砲兵本廠貯蔵分を支廠へ送付の事。3/17 回答…伺のとおり。	C04027198300
27	― 3/16	滋野中佐 神戸分局着	←	砲兵支廠 関中佐 大阪高麗橋 分局発	**スナイドル、アルミニーの内 5,60 挺巡査に渡し方の義　午後 7 時 5 分発　暗号電報** 巡査に銃を渡す件、銃は差支えないが、弾薬は戦地にて費やす数 1 日 60 万発なりと井上少佐より報知あり。これには甚だ痛心致し、鳥尾中将へ上申せし次第もあり。なるべくエンフィールドを貸渡しなりたし。何分の返事待つ。同日電報着。	C09081899200
28	3/18 ―	高瀬 山縣参軍	→	鳥尾中将	**第四百三号　田原口に於ける弾薬消費の件** 田原口に於いて、去る 14 日頃に費やす小銃弾薬およそ 45 万発内外に至る。山鹿口も同様に多数なり。詳細は後報するが取りあえず申入れておく。	C09081780700
29	3/19 ―	陸軍中佐 渡辺　央	→	海軍秘史官	**海軍省のスナイドル弾薬借受に付、受取方照会** 海軍省貯蔵の 50 万発を代価 13,556 円、1 発につき約 3 銭をもって陸軍省へ貸渡依頼。砲兵本廠より受取の者を差出すのでお引渡願いたい。	C04027568200 C04027198800 C09112355900
30	3/20 ―	（砲兵支廠） 関中佐	→	黒田少佐	**長崎へ送るスナイドル弾薬 100 万発他の件** スナイドル弾薬のほかアルミニー銃 50 挺を、信太大尉等の乗込む船へ積み込みたいので同人へ達し願いたい。	C09081783300

【田原坂の戦い後　熊本城開城前まで】（3 月 21 日～ 4 月 14 日）

No.	発信日 返信日	発信		着信	件 名 と 概 要	主なｱｼﾞ歴 ﾚﾌｧﾚﾝｽｺｰﾄﾞ
31	3/20 3/21	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**スナイドル弾薬ほか 3 点、砲兵支廠へ送附の儀に付伺** 砲兵本廠貯蔵分の 450 万発、四斤榴弾 8 千発、同榴霰弾千発、同霰弾千発を支廠へ送付の事。3/21 回答…伺のとおり。	C04027199200

No.	発信日 返信日	発信		着信	件名と概要	主なアジ歴 レファレンスコード
32	3/23 3/24	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**スナイドル弾薬材料御買上の義に付伺** 2/26 付の 500 万発製造の御達も貯納弾薬追々欠乏につき、さらに 1,800 万発製造したいが、材料の鉄座用細鉄、厚薄クランカンは砲兵本廠での製作は難しく、至急の需用に応じられないので、欧州へ注文買上げ伺。3/24 回答…伺のとおり。	C04027201700 C04027201500
33	3/24 3/25	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**演習用スナイドル弾薬、砲兵支廠へ送附の義に付伺** 120 万発、砲兵本廠貯蔵分を支廠へ送付の事。3/25 回答…伺のとおり。	C04027201100
34	3/24 —	山縣参軍	→	鳥尾中将	**(スナイドル)弾薬をなるたけ費やさざるよう当各旅団へ御達し** 先鋒旅団に既に達したとおり、黒田参軍部下の別働各旅団へも同様に達し置きたし。かつスナイドル弾薬の 1 日の製造高はどのくらいか承知しておきたいので回答を待つ。	C09081547900
35	— 3/25	鳥尾中将	←	高瀬 山縣参軍	**3 月 25 日号外** 20 日付書中の、八代へ 7 千余の兵の増員の件、もはや繰出す兵員も無く、現状の兵数で二念なく突入するほかなしと決議した。今の勢いは退いて守るの機に非ず、たとえ敗れるも進むほかなし。弾薬のこと承知、費やす量夥しいこと止むを得ず。しかし、なお一層厳しく軍隊に節用を令すること。弾薬は至急海外へ注文するか、製造数を増加するか充分手当の事。→読み下し⑤	C09080811600
36	— 3/25	在大阪 太政官書記官	←	陸軍参謀部	**鹿児島丸寧静丸へ積込取帰器械其他御承知** 積込取帰の器械、照会の件承知したので、別紙のとおり回報の事。別紙　小銃取交廃品 15 挺、小銃弾薬製造用器械 30 発〆 15 認キ、短四斤砲装薬炸薬 85 個、長四斤砲装薬炸薬 53 個、四斤弾 168 発、火薬 8 貫目入 19 樽、十二拇三眼弾入り古モノ 4 個、毛氈コロス入 10 叺、竿鉛 143 本、丸流しトタン 2 個、銅板 28 認キ、スナイドル弾薬製造用器械入 2 箱、同解放器械入 86 個、以上寧静丸へ積込の分。火薬 8 貫目入 3,440 樽、以上鹿児島丸へ積込の分。	C09081522300
37	3/25 —	関中佐	→	滋野中佐	**黒田中将が没収したスナイドル弾薬製造器械受取の件** 直ぐに砲兵支廠へ備付の儀、この器械はもともと水車での製造用であり、蒸気設備と建物が無くては製造できず、その費用伺。製造器械据付、工廠建築費、蒸気鑵買入器械等一切入費概計、金 1 万円。建築着手よりおよそ 30 日間で落成の見込み。 →読み下し⑥	C09081548800
38	3/26 5/15	関中佐	⇔	陸軍中将 鳥尾小弥太	**スナイドル弾薬製造所建築并蒸気鑵買入器械補欠費別途御下渡の件伺** 今般鹿児島県で没収したスナイドル弾薬製造器械は全備せず、もともと水車用で現状では製造できない。また器械の部品が足りず、さらに器械を取り付ける建物もないため、その費用を下げ渡し願いたい。5/15 回答…伺のとおり。→読み下し⑦	C09081184700

No.	発信日 返信日	発信		着信	件名と概要	主なｱｼﾞ歴 ﾚﾌｧﾚﾝｽｺｰﾄﾞ
39	3/29 —	西郷中将	→	鳥尾中将	**巡査 800 名九州出張に付、スナイドル銃譲り受ける件** 明日巡査出張につきスナイドル銃貸渡の依頼があったが、陸軍省でも必要につき断った。しかし是非とも後装銃が必要との依頼につき、長スペンサー銃千挺、弾薬 50 万発大阪へ廻す。砲兵支廠にはツンナール銃多数あり、他の後装銃でも貴官の見込み次第で其の地で貸渡し下さい。	C09081553500
40	3/31 3/31	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**小銃弾薬、砲兵支廠へ送附の義伺** エンフィールド銃 4 千挺、同弾薬 300 万発、スナイドル銃 1,200 挺、アルミニー銃 900 挺、スナイドル弾薬 100 万発、砲兵本廠貯蔵分を支廠へ送付の事。同日回答…伺のとおり。	C04027203500
41	3/31 4/4	内務省警視局	⇔	陸軍省	**警視局よりエンフィールド弾薬 20万発御渡相成度依頼** 非常用として陸軍省火薬庫へ兼てより仕分の内、20 万発を御渡し依頼。4/4 回答…砲兵本廠で受取の事。	C04026923600 C04027576800
42	4/2 4/4	陸軍省	⇔	海軍省	**スナイドル弾製造器械御借受の儀に付伺** 海軍省貯蔵器械を陸軍砲兵本廠へ借受伺い。4/4 海軍省回答…4/6 即日陸軍砲兵本廠へ引渡す。	C04027213000 C04027399800 C09112346200
43	4/2 —	上木葉 山縣参軍	→	鳥尾中将	**木留村、薩軍攻撃最中に付、弾薬の事酌量依頼** 昨日報知したとおり、現在木留村を攻撃中である。とにかく死傷者が多く兵員が減り甚だ困っている。かつ最も急ぐのは弾薬の事である。痛心至極、酌量を願う。	C09081583600
44	4/2 —	本営	→	高瀬砲廠	**明治 10 年「大日記 4 月乙 軍団本営」** 一昨日、高瀬砲廠弾薬受払表を見るとスナイドル弾薬、現在少しも無いように見えるが、これはどういうことであろうか。かつ第四旅団へ引渡しの弾薬は用意しているか。両件とも、即答のこと。	C04027832000
45	— 4/3	七本 参謀部砲廠	←	木葉砲廠	**木ノ葉砲廠、現在の弾薬数取調申出の件** 木葉砲廠在庫数…スナイドル弾 85 万発余、四斤山砲弾薬 6,500 発余、ブロートウエル弾 400 発余。	C09083623700
46	4/4 —	大阪 鳥尾中将	→	木葉 山縣参軍	**明治 10 年「大日記 4 月来甲 軍団本営」** 弾薬の件、当方でも一方ならず痛心し、いろいろと手段を尽しているが、これまで貯蔵の分を打尽せば、当面後を続けることはできない。今よりｴﾝﾌｨｰﾙﾄﾞ銃と徐々に引替の事。→読み下し⑧	C04027835500
47	— 4/4	山縣参軍	←	大阪 村田少佐	**明治 10 年「大日記 4 月来 甲 軍団本営」** スナイドル弾薬 400 万発 3 月 31 日福岡へ送付済。残り 340 万発神戸大阪に在り、船あり次第送る。東京に 100 万、仙台青森間におよそ 100 万在り、まもなく大阪へ着の予定。日々出来るほかにスナイドル弾薬なし。又エンフィールド銃 3 千挺、弾薬 200 万発は船在り次第送る。エンフィールド銃 5 千挺、弾薬 100 万発砲兵本廠にあり、まもなく大阪へ着の予定。又（村田）経芳は船あり次第、弾薬と共に出帆する。	C04027835500
48	4/4	山縣参軍	→	三浦陸軍少将	**スナイドル弾薬に関する将校に注意を促す告諭の通知** スナイドル弾薬のこと、是まで再三伝えてきた。各隊長中においても、もとより注意をおろそかにする事はないと思うが、なお念のため告諭する。 →読み下し⑨	C09084860100

No.	発信日 返信日	発信		着信	件名と概要	主なアジ歴 レファレンスコード
49	4/4 4/4	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**マルチニー銃同弾薬、砲兵支廠へ送附の義伺** 海軍省より借受のマルチニー銃 2,500 挺、同弾薬 190 万発、砲兵本廠貯蔵分を砲兵支廠へ送付す。同日回答…遊撃歩兵 2 中隊へ渡す事、伺のとおり。	C04027213700
50	4/4 4/8	砲兵本廠提理 陸軍大佐 大築尚志	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**旧水戸城仮火薬庫守衛兵御引揚の儀に付伺** 東京府下各火薬庫格納の弾薬を砲兵支廠へ送付の指令により、茨城県下旧水戸城仮火薬庫に格納のエンフィールド弾薬を残らず運搬したので、守衛兵は不要。4/8 回答…伺のとおり。	C04027401700
51	4/4 —	松方大蔵大輔	→	西郷中将	**上海品川総領事より電報 本日 8 万千発を積込み差送りたり**	C09082782800
52	4/5 4/6	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**スイスマンソウ後装銃弾薬製造の儀に付伺** 弾薬不足につき、至急 200 万発製作致したく製作費伺。4/6 回答…伺のとおり。	C04027214000
53	4/4 4/5	警視局	⇔	陸軍少佐 児島益謙	**警視局より非常用エンフィールド弾薬仕分の内 30 万発御渡** 陸軍省火薬庫に仕分の内 30 万発並びに雷管 40 万発、至急御渡し伺。4/5 回答…30 万発御渡依頼の件、警視局非常用として陸軍省火薬庫へ収蔵のエンフィールド弾薬 70 万発の内、昨 9 年 11 月 1 日 10 万発、12 月 11 日 20 万発、本年 3 月 31 日 20 万発、合計 50 万発既に渡し済。残数 20 万発につき回答願いたい。	C04026924800 C04026924900 C04027577900 C04027578000
54	4/6 4/6	砲兵支廠提理 御用取計 陸軍中佐 関迪教	⇔	鳥尾中将代理 陸軍少将 四條隆謌	**非常費御下渡の件伺い** 征討につき弾薬製造、修理等無数の費用を約定額より支払のところ忽ち払底、2 月末に 6 万円御下金ありましたが、これまた殆ど払底し後 2 週間を支える分しかない。未だ戦地の景況はわからないので、この先さらに大いに製造修理を要し、兵器弾薬等の買い上げもあり。ついては金 5 万円を下渡し願いたい。同日回答…伺のとおり。	C09081653800
55	4/6 4/6	砲兵本廠提理 陸軍大佐 大築尚志	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**大坂支廠より申越候件に付エンフィールド弾薬等製造着手の件伺** 支廠関中佐より電報をもって申越しの 3 件、①エンフィールド弾薬製造至急着手する事。②アルミニー銃の改造を見合せ、エンフィールド銃を用いる事。③第一方面内のエンフィールド銃を取りまとめ至急砲兵支廠へ送付の事。以上、取計らうべき事ならば至急取りまとめに着手し、近衛、士官学校、戸山学校、教導団及び東京、仙台、名古屋の三鎮台へ引渡すよう至急御達し伺。同日回答…伺のとおり。	C04027400700
56	4/6 4/7	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**エンフィールド銃及レカルツ銃弾薬製造の義に付伺** 不足につき、至急エンフィールド弾薬 1,000 万発、レカルツ弾薬 20 万発製作致したく製作費伺。4/7 回答…伺のとおり。	C04027214800
57	4/7 —	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	→	近衛局	**備付のエンフィールド、スナイドル銃並弾薬返納の達** 近衛局備付置き分で、いま不用の分は悉皆、砲兵本廠へ返納の事。	C04027225400

No.	発信日 返信日	発信		着信	件名と概要	主なアジ歴 レファレンスコード
58	— 4/7	砲兵本廠	←	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**東京鎮台返納の銃器弾薬可受取達** 武庫主管に預りの銃器弾薬を悉皆、砲兵本廠へ返納の事。	C04027401100
59	4/7 4/9	砲兵本廠提理 陸軍大佐 大築尚志	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**エンフィールド実包并火薬、東京鎮台へ還納の儀御達相成度伺** 青山十二号火薬庫保管のエンフィールド実包30万発余、火薬150樽余、砲兵本廠にて弾薬多数入用につき、ひと先ず還納依頼。4/9回答…書面の趣、送第千九百号のとおり可相心得事。	C04027402600
60	4/8 4/9	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**スナイドル弾空筒買入方、砲兵本廠より御達の義伺** 500万個買入方、ハーブルブランド商会へ注文する事。4/9回答…伺のとおり。	C04027215400
61	— 4/8	警視局	←	陸軍少佐 児島益謙	**警視局へ非常用銃器弾薬等砲兵本廠へ相達云々答** 陸軍省火薬庫収蔵の警視局非常用エンフィールド弾薬の残数20万発、雷管30万粒御入用の件、本廠で受取の事。	C04027580300
62	4/9 —	葛岡少佐 長崎局発	→	渡辺中佐 大阪高麗橋分局着	**弾薬の事承知せり、スナイドル弾は式違いの品にて買入見合すべし　葛岡少佐** 支那地方より買入のスナイドル弾薬25,000発到着の処、火薬も装し無く、その上式違いの品で役にたたない。よって買入見合わすべき旨、品川領事へ電報の事。当地より明後日の船便にて、見本を差回す積りにつき申す。	C09081595600
63	— 4/9	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	←	川村海軍大輔 代理 海軍少将 中牟田倉之助	**往出586スナイドル銃弾薬貸渡の義陸軍省へ回答** 海軍省予備品も払底だが、山縣参軍より示談もあり、川村参軍より譲るよう電令あり。精々繰合せ、予備115万発の内100万発を陸軍省へ貸渡す。	C09100203600 C09100203700
64	4/9 —	西郷中将	→	渡邉中佐	**西郷中将発渡辺中佐宛 出張兵員への弾薬配布に付て** 7日から12日まで歩兵4個大隊と補欠士官100名余、常備兵2個大隊、歩兵3個大隊、砲、騎兵各1個大隊、工兵1個小隊を増員。 スナイドル弾薬260万発余は支那地方より2週間内に長崎へ達する予定、およそ70日間には500万発、100日間には1,000万発を取寄せ可能。各種小銃1挺につき弾薬7、800発の銃5万挺を備えた。	C09080854400
65	— 4/10	砲廠部	←	高島少将	**スナイドル弾薬50万発、川路少将へ渡方可取計** 第三旅団川路少将より一時貸渡の依頼につき取計らう事。	C09085110100
66	— 4/10	陸軍参謀部 大阪高麗橋分局着	←	出張参謀部 神戸局発	**スナイドル弾薬220発ずつ補充の件速やかに御達相願う** 教導団歩兵第一大隊は1名につき弾薬80発だけなので、あと220発づつ御渡し依頼あり。もっとも、神戸より博多へ廻す弾薬あるよし。	C09081596000
67	4/10 4/11	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**東京鎮台第二後備軍よりスナイドル弾薬渡方の儀に付伺** 去る4日、東京鎮台より第二後備軍二大隊へ弾薬475,800発引換渡し方伺の内、172,800発は砲兵支廠より支給の事。4/11回答…伺のとおり。	C04027217000

No.	発信日 返信日	発信	着信	件名と概要	主なｱｼﾞ歴 ﾚﾌｧﾚﾝｽｺｰﾄﾞ
68	4/11 —	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	→ 砲兵支廠	**支廠へ銃器弾薬受取べし** レカルツ歩兵銃千挺、同弾薬 26 万発、スナイドル弾薬 60 万発、四斤山砲薬嚢 1 万個、同紙管 1 万本、万力 2 千個を砲兵本廠より送付す。	C04027403400
69	4/11	砲兵本廠提理 大築尚志		**砲兵本廠に於て条約の写し** 陸軍砲兵本廠と横浜居留ﾌｧﾌﾞﾙﾌﾞﾗﾝﾄ氏との 5 カ条の条約。（一部抜粋） スナイドル銃弾薬空筒 450 万発、ただし雷粉を装したもので、英国政府にて軍用に供するものと同一のもの。代価 49,500ドル、千発につき 11ドル。	C09082782200
70	4/11 —	黒田少佐	→ 滋野中佐	**当港より肥後海長洲への航海時間の件** 神戸港からの航海時間は速力中等の船で、かつ海上穏やかな時、52、3 時間を要すると、鳥尾中将より報告があった。	C09081597700
71	4/12 4/12	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔ 陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**金沢営所より貯蔵のエンフィールド弾薬、砲兵支廠へ送附の義に付伺** 弾薬悉皆、砲兵本廠より支廠へ送付す。同日回答…伺のとおり。	C04027220400
72	4/13 —	大阪 渡辺中佐	→ 上木之葉 山縣参軍	**スナイドル弾薬 260 万発ほか達する筈** 弾薬 260 万発はおよそ 20 日間以内、500 万発はおよそ 70 日間、1 千（万）発は 100 日間で長崎に達する筈と申来たれり。弾薬着毎に総督本営へ電報のこと。（暗号電報）	C09082761200
73	4/13 4/13	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔ 陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**エンフィールド銃ほか 4 点、砲兵支廠へ送附の儀に付伺** エンフィールド銃 3 千挺、同弾薬 500 万発、中折拳銃 170 挺、同弾薬 2 万発、英式騎兵鞍 50 背、砲兵本廠貯蔵分を支廠へ送付す。同日回答…伺のとおり。	C04027217400
74	4/14 4/15	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔ 陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**マンソー銃御買上の儀に付伺** 外商ﾊｰﾌﾞﾙﾌﾞﾗﾝﾄﾞ所持のマンソー銃 3,372 挺と弾製造器械、属品共、買上の許可伺。同日回答…伺のとおり。同日、第五局へ達す。	C04027218800
75	4/14 4/14	警視局	⇔ 陸軍省	**警視局より巡査発遣に付、弾薬 30 万発御渡依頼** 明後 16 日、巡査出張に際し弾薬不足にて甚だ差迫り、砲兵本廠製造の内エンフィールド弾薬 30 万発、雷管 45 万粒、代価をもって御渡依頼。同日回答（西郷中将より支廠へ）…砲兵支廠にて相当代価をもって渡すべし。	C04026931500 C04027404900

【熊本城開城後５月まで】（4 月 15 日～５月）

No.	発信日 返信日	発信	着信	件名と概要	主なｱｼﾞ歴 ﾚﾌｧﾚﾝｽｺｰﾄﾞ
76	4/15 4/16	警視局	⇔ 陸軍省	**警視局よりエンフィールド弾薬 30 万発御渡依頼** 船積を急いだため、警視局備付非常用の内から昨日積出した。その分は当地で当局の予備として、すぐに御渡願いたい。4/16 陸軍省回答…当省予備の都合もあり、一度にお渡しするのは難しいが、追々請求の員数は貸渡す。	C04026932400 C04027585700

No.	発信日 返信日	発信		着信	件名と概要	主なｱｼﾞ歴 ﾚﾌｧﾚﾝｽｺｰﾄﾞ
77	4/19 4/22	第三局長代理 陸軍大佐 原田一道	⇔	陸軍卿代理 陸軍中将 西郷従道	**スナイドル弾薬ほか2点、砲兵支廠へ送附の義伺** 弾薬60万発、十三拇臼砲榴弾375個、同信管300個、砲兵本廠貯蔵分を支廠へ送付す。4/22回答…伺のとおり。	C04027220600
78	4/21 —	西郷中将	→	熊本城にて 山縣参軍	**西郷中将発山縣参軍宛 弾薬等の買入に付て** スナイドル弾薬、支那地方よりおよそ2週間内に長崎、神戸へ向け260万発、欧州より500万発は砲兵本廠にて注文、およそ70日間に横浜へ着。ほかに大蔵省より欧州へ注文、300万発はおよそ100日間に横浜に着、合計1,060万発、條約の日限に来着の筈。かつ砲兵本廠のスナイドル弾薬製造は1日半に5万発、数百人の製造昼夜間断無く、徹夜点燈非常の勉励にてご心配なく。 →読み下し⑩	C09080854300
79	4/23 —	大蔵少書記官 岩崎小次郎	→	西郷中将	**スナイドル弾薬の儀に付、品川総領事申越の事** 本月7日付の電報で、スナイドル弾丸200万発李鴻章より借入予定。在天津の池田副領事と森全権公使へもそれぞれ伝えたので、2、3日内には天津の状況を電報する。香港で購入の5万発は船の積込が難しく遷延する。 清商何福蔭、在天津兵隊長関姓より24万発借入し、千発につき上海銀25両の件もあり。	C09082783200
80	4/23 4/26	警視局	⇔	陸軍省	**警視局エンフィールド弾薬20万発雷管30万粒、至急御渡相成度件** 本月14日依頼分の弾薬30万発、雷管45万粒は急用のため弾薬20万発、雷管30万粒を至急御渡願いたい。4/26回答…代価をもって貸渡すので、砲兵本廠で受取の事。	C09120309500 C04027592600
81	4/24 —	東京 西郷中将	→	山縣参軍	**大蔵省買上げスナイドル弾薬、到着の日限取調たる所** 10万発は東京丸にて4/25上海発、28日頃長崎着予定。5万発は4月中に長崎へ到着予定。砲兵本廠の60万発は、明後日名古屋丸にて神戸に送る。	C09083182800
82	— 4/25	西郷中将	←	松方大蔵大輔	**英国へ注文のスナイドル弾薬300万発問合の件** 4月10日付契約の第1期100万発は6月下旬、第2期100万発は7/15頃、第3期100万発は7月下旬に到着予定。ただし、船便の都合により現地多少の遅速あり。	C09082783100
83	4/26 —	兵器局副長 海軍少佐 末川久敬	→	海軍大輔川村純義代理 海軍少将 中牟田倉之助	**スナイドル弾薬購求并に陸軍省及警視局より償還の義上申** スナイドル弾薬2,357,130発、代金63,906円50銭9厘、ただし千発につき27円11銭2厘。 警視局へ貸渡…計25万発。10万発は2/13、9万発は2/22、6万発は2/24に渡した。陸軍省へ貸渡…計150万発。50万発は3/16、100万発は4/9に渡した。海軍省支出分…607,130発。 以上、貸渡の分は現品で返還予定だったが、貸した弾薬は純良品を選んで渡し保存期限もあり、現品返却では品質の優劣が出、将来の利害に関する。よって、今回は代金をもって償却願いたい。かつ海軍省のスナイドル弾薬残数は15万発余であり、至急外国へ注文したい。	C09100291800

No.	発信日 返信日	発信		着信	件名と概要	主なアジ歴 レファレンスコード
84	5/6 —	西郷中将	→	井田少将	**西郷中将発井田少将宛スナイドル弾薬配布に付いて** スナイドル弾薬は、1日何発製造できるか。かつ在庫数を知りたい。もっとも戦地の模様その後異状なけれども、製造はますます油断なきよう取り計られたい。	C09081011300
85	5/9 —		→	井田少将	**弾薬未受領に付いて** 香港にて買入のスナイドル弾薬5万発は、4月中に長崎へ到着の筈だが、未だ到着せず。本営でも当てにしていると山縣参軍より申し来た。これは、どういう理由だろうか。松方大蔵大輔へ督促し至急返事の事。天津の200万発の内10万発は借入できない旨、上海より電報あり。	C09080791500
86	5/9 —	上海 品川領事	→	大阪造幣局 大隈大蔵卿	**品川領事より電報の訳** この日長崎へ向けスナイドル弾薬15万発を船積した。欧人等この日長崎へ向けスナイドル弾薬79,000発、スナイドル銃506挺、又神戸の鳥尾君へスペンサー銃1,050挺、弾薬105万発を船積した。購求したスナイドル弾薬5万発は、5/4船で横浜へ送った。 5/15に西京丸で、ハスケル氏より長崎へ向け弾薬5箱を送る。ただし、その数は分からず。	C09081034200
87	5/9	山縣参軍	→	各旅団	**スナイドルをエンフィールド銃に引換の分無之追々引換可致件** 『征西戦記稿』巻二十四弾薬消費の5/9とほぼ同文。	C09085363100 C09080676700
88	5/10	第二旅団砲廠 山根陸軍中尉			**5月10日改調　在庫弾数船積増数スナイドル弾山砲弾** 在庫弾数スナイドル弾287,800発、山砲弾55箱ただし紙管弾5箱入。船積増数スナイドル弾862,200発、山砲弾95箱。合計スナイドル弾115万発、砲弾150箱およそ1,200発也。 スナイドル弾は各自携帯ならびに各中隊予備弾薬を除き、合計115万発を下士兵卒に割れば各500発となる。山砲弾は砲隊持越の分を除き、合計150箱を砲6門に割れば、1門毎におよそ200発となる。 各隊の弾薬と砲廠の弾薬を合計して、各士卒に割れば各700発となる。よって毎戦各自100発を消費すれば、1週間の見込。万一、各自200発を消費すれば3戦半にあたる。	C09084252000
89	5/11	第四旅団 参謀部			**旅団履歴　5月11日第四旅団参謀部簿冊** 長崎砲兵部井上少佐より第四旅団砲廠部へ砲弾薬等回送あり。5月8日長崎港出帆の汽船豊嶌丸にスナイドル実包50万発ほか積込む。 →読み下し⑪	C09084987100
90	5/13 —	別働第三旅団 司令長官 陸軍少将 川路利良	→	別働第二旅団 司令長官 陸軍少将 山田顕義	**雷管120万粒スナイドル弾薬100万発ほか御渡相成度** 当旅団所用の弾薬追々欠乏につき、至急雷管、スナイドル弾薬ほかエンフィールド弾薬100万発をお渡し願いたい。	C09085391000
91	5/14 5/16	内務省警視局	⇔	陸軍省	**警視よりエンフィールド弾薬請求の件** 九州地方巡査出張入用のため、弾薬60万発、雷管共至急御渡依頼。5/16陸軍省回答…砲兵本廠で受取の事。明17日九州地方へ巡査発遣につき、一昨日14日依頼分のほかに、エンフィールド弾薬40万発、雷管共に依頼分も本廠で受取の事。	C04026941000 C04027606400 C04027606500

No.	発信日 返信日	発信		着信	件名と概要	主なアジ歴 レファレンスコード
92	5/14 —	日奈久出張 別働第四旅団 参謀部	→	八代 同団参謀部	**熊本鎮台より2個中隊貴団へ差越処スナイドル銃及弾薬携帯の件** 別働第四旅団へ派遣される熊本鎮台2個中隊は、スナイドル銃を所持、弾薬1人120発、携帯予備100発。2個中隊（1個中隊あたり100人）は球磨川上流へ派遣予定。	C09085361600
93	5/15 5/17	砲兵支廠提理 御用取計兼勤 陸軍中佐 関迪教	⇔	陸軍中将 西郷従道	**スナイドルドース御買入の件伺** 砲兵支廠貯蔵の分は殆んど払底した。器械は未だに全備できていないため、製造しても戦地1日の消耗を補うのに10日製造の数でも充たせず、戦地からの請求があっても応じる弾もなく危機感を持っている。いま戦争が平定したとしても、すでに消耗した弾薬数を補うには3年もかかり、常備の弾薬が無くてはならず、至急ドイツ国商より買入の定約を願いたい。5/17回答…伺のとおり。 →読み下し⑫	C09081185000
94	5/16 6/10	砲兵支廠提理 御用取計兼勤 陸軍中佐 関迪教	⇔	陸軍中将 西郷従道	**反射炉及大砲轆轤場、小銃製造場建築并器械買上費別途御下渡の件伺** 開戦以来、戦地より続々と弾薬の請求があるので、昼夜を分かたず製造しているが、弾薬消耗の数が製造高の10倍であり、百方苦心するも未だ器械も全備せず、これ以上どうすればいいか分からない。気をもむこと2か月あまり、今より一層弾薬を製造したいので、建築費等の費用をお渡し願いたい。6/10回答…伺のとおり。→読み下し⑬	C09081190400
95	5/16	長崎（砲廠） 井上少佐			**軍機要領之部　長崎井上少佐より電報** スナイドル弾薬の売物、これまで西洋人の手で長崎へ輸入分は、砲廠、警視署、県庁等で買入し、今は売物は少しもなし。	C09080792700
96	— 5/16		⇔	山縣参軍	**軍機要領之部　山縣参軍へ電報** スナイドル弾薬、30日後には砲兵本廠で日々20万発出来る機械により工部省、横浜等で昼夜製作し、必ず出来る見込みと井田少将より申し来た。念のため問合せると必ず出来るとの返事あり。 山縣参軍より回報、どのようにして、そんなにたくさん出来るのか、また弾薬買入の件ほか今少し委細を郵便で知らせてほしい。もし、相違があれば甚だ不都合につき重ねてお願いする。 →読み下し⑭	C09080792700
97	— 5/17	西郷中将 大阪高麗橋分局着	←	（第四局長） 井田少将 東京築地局発	**スナイドル弾薬の義横浜製鉄所等にて製造の事** 横浜製鉄所ならびに工部製作所等で、昼夜を分かたず製造。「20万発製造できるようにします」とは砲兵本廠の大築大佐が受けて言う事で、本営が言ったことではない。	C09080869300
98	— 5/18	陸軍中将 西郷従道	←	陸軍少将 井田譲	**井田少将発西郷中将宛 銃弾の製造に付て** スナイドル弾薬日々20万、エンフィールド15万、マンソウ10万づつを製造できる様、至急着手すべき旨の命あり。弾薬製造の器械備付手続きと工業順序等の用意に取りかかる事。器械（但しスナイドル）、人員、家屋、材料について。6月初めから中旬頃に落成予定。→読み下し⑮	C09080854400 C09080854500

No.	発信日 返信日	発信	着信	件名と概要	主なアジ歴 レファレンスコード
99	― 5/19	陸軍省	← (第二旅団) 山根中尉	**銃、弾薬等の状況に関する報告書** スナイドル弾薬は無数にして充分である。四斤山砲弾薬50箱（すべて紙管弾）、予備スナイドル銃100挺、同胴乱200個、松橋にある。 →読み下し⑯	C09084535400
100	5/27 ―	山縣参軍	→ 西郷中将	**第22号　弾薬量質問に対する回答催促** 弾薬製造の手続きならびに買入の事も郵便で詳しく知らせるよう伝えたが、未だ返事なし。日々の戦争で弾薬消費は少なからず、この先甚だ懸念である。早く詳細を伝えてほしい。→読み下し⑰	C09080812800

「検索概要一覧」読み下し文

①No.1　明治9年12月27日

砲三十号　弾薬費をもって建築費に流用の件伺

エンフィールド銃弾薬製造費定額一万八千八百二十六円六十銭五厘宛てこれ有り。右金額の内を以て、九年七月より十年六月までその弾薬三百十二万四千四百三十四発製造申し付けこれ有り候処、来る十年六月まで陸続製造致し候ても、多分の残金相生可申加の各鎮台へスナイドル、アルミニーの両銃御配賦相成可く御達もこれ有り。右、銃交換の後は是迫備え付け相成居り候エンフィールド弾薬すら不用に属し可申、大阪、廣嶋、熊本の三鎮台より返納すべき員数二百七十七万四千百七十八発、之れに在庫の数四百四十三万〇六百四十三発を合するときは、惣数七百二十万四千八百二十一発、而して年々其の消耗する数は僅かに新兵の演習に過ぎず斯くの如く支給高減省するもなお新製に汲み致し居り候は無用の如く相考られ候間、今よりエンフィールド弾薬製造差止められ候時は、一万八千二百余円の残金相生じ候に付、此の金員を以て、火工所建築か又は反射炉建築か、両様の内へ御振替相成候以。無用は忽ち有用に化し、工廠進歩の一助とも相成可く申候間御詮議の上、何分御指令下されたく、此の段相伺候也。

陸軍卿　山縣有朋殿　　明治九年十二月二十七日　　砲兵支廠提理御用取計　陸軍中佐関迪教

伺の趣、聞届候条、火工所及び反射炉建築費に充つべき費用迄分を立図面相添、更に御申出候事。

一月二十九日

②No.8　2月14日

土第百七十壱号　昨十三日、御取調御差出相成に付、当貯蔵銃器挺数并びに弾薬員数共承知致し、就いてはスナイドル実包銃一挺に付、凡そ百発候也。即ち惣計十万五千発御渡申候間、砲兵本廠より御請取可くこれ有り候。尤も右実包は舶来着には候得共、極善良品と申すにはこれ無くの旨御承知置きこれ有り度、此の段御返答及び候也。

大警視　川路利良殿　　明治十年二月十四日　　陸軍大佐小沢武雄

追て成る丈け、弾薬当余分に御渡申度き候得共、目今定額不足の折柄に付、御局より金額御払出相成候わば製造の手段致申可致し、付いては其の懸りの者、当省第三局へ御差出相成候はば同局において委細申述可き候、此の旨申添候也。

③No.17　2月25日

スナイドル弾至急製造方に付いて金額御渡の儀に付伺

是迫追々御達相成候スナイドル弾薬は最早製造相終り、此節は此程警視局へ御譲り渡相成候、四十万発

仕理の口に取掛居り候。然るに昨夜馬関出張先、福原大佐方よりスナイドル弾あと製造方の儀、精々急ぎの段電報これ有り候に就ては、当節の場合兎に角製造方取急ぎ申さず候ては相成間敷くの処、金額に至り候ては大約百万発に付、器械修理材料手間箱等迚、合せて二万三千円程づつも相掛り申し候。右製造は素より定額予算外の事に付、別途金員御渡相成度、且金員如何程御渡相成候哉。製造の員数、金員等兼て伺の処、至急御指令これ有り度候也。

陸軍卿殿代理　陸軍中将西郷従道殿　　明治十年二月二十五日　　砲兵本廠提理　陸軍大佐大築尚志

追て本文の義は、海外購求の品もこれ有り注文の都合も有る旨、大約の目途相伺候義に候也。

書面の趣、五百万発製造致す可き事。但、製造入費は別途相添候に付、至急取調申出可く事。

二月二十六日

④№.25　3 月 13 日

来甲第三百四号　鳥尾中将宛　西郷中将

来る十六日、敦賀丸にて下士四百二十名、銃器を持たせ差出す、并に過刻御申越の一中隊も差出外にスナイドル弾薬数百万発を送る。且今日の電報にて戦地の模様、能く分れり。鶴ケ岡の事は確報を得、先ず気遣いなし。至急二、三艘の船を差越ありたし。

三月十三日午前二時五分　東京発　二時四十分着（神戸分局）

【参考】『西南戦役運輸誌』社誌第五号附録 郵便汽船三菱会社総務部総務課

「敦賀丸徴されて西南征討軍用船と為る」

抜錨月日：3 月 16 日午後 6 時　　抜錨地：横浜

乗客：兵 642 人、文官 38 人　　貨物：小銃 460 個、弾薬 4,100 個、被服薬品 2,034 個、荷 102 個

投錨月日：記入なし　　投錨地：長崎

⑤№.35　3 月 25 日

三月二十五日号外　第八号　今朝出兵のこと通し入れたる処、去る二十日敦賀丸にて発したる軍曹に御托しの貴翰を披見すれば、八代へ七千余の兵数を御繰込なりたる趣、付いては最早御繰出に相成可く兵員もこれ無きに付、此上は居合の兵数を以て二念なく突入する外なしと決議致したり。即今の勢い退いて守るの機に非ず、たとえ敗るゝも進む外なし（ヨツチノチイヨウ（元の侭））御推料ありたし。且弾薬のことも承知せり。開戦以来今日に至り放撃絶間なし、弾薬の費やす□夥しきも亦やむをえざるなり。然れども尚を一層厳敷く軍隊に号令を下し置きたり。賊も必死の防戦すれども彼又頗る弾薬に乏しく、此の上維持すべきの勢なきは概ね見とめも付きたれば、今後は互の費すところも幾何か減ずべし。然れども弾薬丈けは至急海外へ御注文あるか、又は製造の数を増加せしむるか何れにても充分御手当下されたし。

鳥尾中将殿　　高瀬　山縣参軍

⑥№.37　3 月 25 日

第七十一号　過刻、黒田中将処分のスナイドル弾薬製造器械受取の上は、直に支廠へ備付候様、西郷中将の御達を以て御申越の儀、承知致し候。然るに、右器械此日揚陸致し候迚にして、未だ点検着手致さずに付、夫々連続致居候哉相分らず候、及第一此の器械は元水車を以て製造致成候故、蒸気鑵これ無く且つ亦右据付申す可く家屋もこれ無くては転回致さず、大方入費概算すれば別紙の通り相及候事故、別途御下金これ無くては着手致す可き義も取計れず、是等は支廠より伺を経て申来可き、又は何方より御取計下され候哉、一応御尋に及び候旨、御回答下され度候也。

滋野中佐殿　　三月二十五日　　関中佐

記

金　壱万円　但、スナイドル弾薬製造器械据付、工廠建築費、蒸気鑵買入器械補欠等一切入費概計。

右、建築着手より日数凡そ三拾日間にして落成の見込。

⑦№.38　3月26日

スナイドル弾薬製造所建築并びに蒸気鑵買入器械補欠費、別途御下金の件伺

金　壱万円　右は、今般鹿児島県下に於いて取纏しスナイドル弾薬製造器械、速かに取立製造着手致度候処、元来此器械たる水車を以て転回し来りしものにして、今当廠に之を用れば蒸気鑵これ無くては其用を為さず、故に汽鑵買入ざるを得ず。又該地に於いて賊の各所に移しあるものを取纏しものにして、器械全備致さず、尤も補欠夥し其補欠要せざるを得ず。而して器械全備するも其据付る工廠これ無きに付、先ず建築を要せざる可らず。就いて廉々概算すれば本行の金員に相及候旨、別途御下渡下され度、此段至急相伺候也。

陸軍中将　鳥尾小弥太殿　　明治十年三月二十六日　　砲兵支廠提理兼取計　陸軍中佐関迪教

伺之通　　五月十五日

⑧№.46　4月4日

第二百七十七号　（第五号）弾薬の儀、追々御申越し承知す。右に付いては当方にても一方ならず痛心、種々手段を尽し候得共、何分在来貯蔵の分打尽せし上は差当り後を次ぐ能わず。依って今よりエンフィールド銃と漸ゝ引替の見込を以て、既に博多へ向け六千挺余を送り出したり。右の御含にて引替の御着手相成たし。昨夜、村田少佐着、同地の事情篤と承知す。猶当地の都合は同人へ相含め差返し申べく候、此段申入候。

木ノ葉　山縣参軍殿　親展　　四月四日午後六時十分出　〃八時二十五分着　　大坂　鳥尾中将

⑨№.48　4月4日

第二百五十二号　スナイドル弾薬のことは是迫再三申入候様もこれ有り。各隊長中に於いても固より注意疎事無きと存じ候得共、尚念の為、別紙の旨趣告諭相成候はば多少の益にも相成可き歟と存じ、尤も隊長中既に注意充分行届致し候得ば、此上の告諭も無益の事にこれ有り候。御達次第にて公然御取計相成度、此段申入候也。

三浦陸軍少将殿　　四月四日　　山縣参軍

⑩№.78　4月21日

弾薬買入の事を御尋承知せり。兼て申入たるスナイドル弾薬は支那地方より凡そ二周間内に長崎、神戸へ向け二百六十万発、欧州より五百万発は砲兵本廠にて注文凡そ七十日間に横濱へ着、外に大蔵省より欧州へ注文三百万発凡そ百日間に横濱に着、都合千六拾万発條約の日限に来着の筈。最も二百六十万発は大蔵省より代価払済、五百万発は砲兵本廠より半金を払い、三百万発は大蔵省より半金払済に付、たとい欧州大乱に至る共條約相違はこれ無き見込にこれ有り。且つ砲兵本廠にてスナイドル弾薬一日半に五万発宛製造し、其他の小銃千挺以上なる者は尽く一挺に八百発宛の弾薬を備え、又山野砲は弾薬共十分の要意、付いては此後の戦争数月間に及ぶと雖もスナイドルの外にも小銃弾薬の手当有、其上即今砲兵本廠に於いては数百人の製造人、昼夜間断無く徹夜点燈非常の勉励にて、各種の弾薬も盛んに製造すれば御懸念有る間敷く。

熊本城にて　山縣参軍殿　　四月二十一日　　西郷中将

⑪№.89　5月11日

旅団履歴　第四旅団参謀部簿冊

長崎砲兵部井上少佐より、当砲廠部へ砲弾薬等廻送あり。但し、長崎港五月八日出帆の汽船豊嶌丸に積込む。即ちスナイドル実包五十万発、四斤榴弾（着発信管を製すべき分）三百発、榴弾薬（着発信管を製すべき分）百発、着発信管四百発、四斤霰弾四百発、装薬四百発、四斤榴弾（紙管を製すべき分）三百発、紙管十秒以上三百斤、摩擦管二千五百本、「ブロートエル」弾五百発、同装薬五百発、同炸薬五百発、同信管五百個、中折れ二番形「ピストール」三拾挺、十三拇臼砲二門、同弾薬百発、同装薬百発、同炸薬百発、同木管百本、同點火索二条、其外砲具種々あり、略之。

⑫№.93　5月15日

スナイドルドース御買入の件伺

一　洋銀八万二千五百枚　スナイドルドース五百万発の代　但し、千発に付き拾六枚半

右は今般開戦以来消耗する所のスナイドル弾薬実に夥多、為めに当廠貯蔵の分殆んど払底に至り、即今専ら其製造着手致居候得共、器械未だ全備せざるより製出の員数僅少にして、戦地一日の耗額を補うに十日製出の数を以てするも尚充つる能わず。最早此等戦地の請求あるも其需に応ずるの弾なく実に危殆の至り、又今幸いに当役平定に至るも、既に消耗せし弾薬を補うに当三年の年月を費さざるべからず。此間亦多分常備の弾無かるべからず等、以て前書の通り独乙国商ゴロツスへ定約取詰至急御買入相成候様致度、別紙買入手続書相添此段相伺候也。

陸軍中将　西郷従道殿　　十年五月十五日　　砲兵支廠提理御用取計兼勤　陸軍中佐関迪教

追て本文の義、御許可相述可き義にて定約取詰手都合もこれ有り旨、至急御指令下され度、此段申添候也。

伺之通　但し、金額の儀は当所会計部に於いて受取可き事。

五月十七日

スナイドルドース　五百万発　内、百万発定約日より七十日着、二百万発八月三十日着、二百万発九月三十日着　右之通

⑬№.94　5月16日

反射炉及大砲轆轤、小銃製造場建築並器械買上費別途御下渡の件伺

当二月下旬、鹿児島県士族暴動萌芽し官軍出兵開戦以来戦地より請求の兵器弾薬陸続多々、随って昼夜を分たず製造に従事するも消耗の数、製造高の十倍し倉庫為めに空し、茲に於いて百方苦心仕候も如何せん未だ製造器械全備せず、知って行くべき道なきものゝ如し、只徒に焦思して二ヶ月有余の日子を経過仕候。然るに尚此以後、西に東に草賊蜂起せんとも申し難く、且つ未だ西陸平定にも至さず候へば、今より一層兵器弾薬製造の方法御奨励下され、別紙の金員別途御下渡相成度、此段相伺候也。

陸軍中将　西郷従道殿　　十年五月十六日　　砲兵支廠提理御用取計兼勤　陸軍中佐関迪教

追て、当支廠には銃工廠の御設置これ無く御規則に候得共、砲兵第二方面は即ち三鎮台を包括致居、大阪以西の事ある時は勿論通常と雖も工廠これ無くては事実差支え分からず候間、特別の御詮議を以て小銃廠設置の義、御許可相成度此段伺添候也。

伺之通　但し、金員の義は当所会計部に於て受取可く候。　　六月十日

⑭№.96　5月16日

山縣参軍へ電報「スナイドル弾薬、今より三十日を過れば砲兵本廠にて日々二十万発宛出来る由、其機

械は工部省及び横濱等にて昼夜怠らず差急ぎ製作し、必らず右日数中に出来の見込なりと、井田少将より申来るに付、尚念の為め委しく問合せたる所、必らず出来る由申来る。依って御心得の為め申入置く。」然るに其回報に「弾薬の儀に付御申越の趣承知、右は如何様の手続にて左様沢山出来るや。又兼て御照会の弾薬買入其他も、今少し委しく承知致度、両條共郵便にて御申越下さる可し。此事件は若し相違の儀有りては甚だ不都合に付重ねて申入置く。」

⑮№.98　5月18日

スナイドル、エンヒール、マンソウ、銃弾薬製造の方法詳細申進可く電報の趣承知致し、即器械備付の手続并びに工業順序別紙の通候旨、右にて御領掌相成度、最今度の儀は電報にて申し上の通、前段征討総督本営に申置可く来し訳を本営□全へ當地限り協議を遂げ前條の手続に取計可く見込に付、此段御承知相成度□御申越の通飛信を以て此段申進候也。

陸軍中将　西郷従道殿　　明治十年五月十八日　　陸軍少将　井田譲

（別紙）

今般スナイドル弾薬日々二十万、エンヒール十五万、マンソウ十万づつを製し得る様、至急着手すべき旨の命により夫々其用意に取掛りたりしに右手順、猶申出べき旨により開申、左の如し。

第一器械のこと　但スナイドル

方今在来の器械に　ベルス六雷管製作用、ベルス三雷管ロンテル援用、ベルス六雷管室製作用、ベルス二雷管室ロンデル援用、ベルス五鉄ロンデル穴明製作用、紙球切三、薬包長定器二、雷粉〆付器二。

以上の二十九台を増加し一日十万づつを製し得る様にす。但し此分本廠内鍛工第二廠に於て製作、来月五、六日の頃までに落成の積り。

右第一段　右の外、猶日々十万を製する器械のことは製作簡易にして総て人手にて薬包を製するものに決し（蒸気力にて運転のものは器械に煩あり。又製作に手間取るを以て巧みなれども之を用ず）、之を赤羽製作寮と横濱製鉄所と本廠内とに分配し、今よりなるべく四週間内に落成に至らしめんとし、其員数分配別紙甲印のものゝ如し。

右第二段　エンヒール、マンソーの為の器械は格別のものに之れ無きを以て略す。

人員のこと

スナイドル弾薬二十万を製するには工人二千六、七百人を要す。以後マンソウ、エンヒールの分は多く婦女子の工人に為さしめ今ある所の男児の工人は総てスナイドルの方に廻し千百人を得、依って是より器械の増加に従って人員を次第に増し二千六、七百人に至らんとす。

エンヒール、マンソウは総て旧高松邸内に移し之を為さしめんとす、工人此の両種に当るもの千三百人、是皆婦女子を用ゆ、人種は廠内に入る諸工人の家族中より之を募るなり（但し其他にても苦しからず）。

家屋のこと

スナイドルは本廠内の火工所に於て総て之を行わんとし今在る所のエンヒール、マンソウに用い居る所も皆之に用い、猶不足の分。

職工会食所二棟　六間に二十間、細工場（ペルス等を置く）二棟　六間に十八間、巻出器械（ラミノワル）場一棟　五間に二十間　但し蒸気は在るものを用ゆ。　右本廠火工所前

エンヒール、マンソウの薬詰の為め及びスナイドル薬詰、火工所内第七廠のみにては不足に付き之を補う為め小石川橋内練兵場の後ろ土手下の所に於て各仮りに土塁を囲し其内に薬詰場箱詰場等を建ること左の如し。

四間に十三間のもの六棟。右家屋も人員の増加と器械の落成に前き立て之を建つ。

材料のこと

何れも差支え無き様之を用意す。

本廠鍛工一二廠　鋳工　ロンデル取附器械三十、雷管取附器械二十、雷管穴明け器械四十、ラミノワール（四人懸りの者）一、薬包長定器械三。

本廠銃工一廠　ヘルス十、一号より十号迠臼杵許多、十連鋳形四十。

横濱製鐵所　ヘルス二十、紙切器械十二、一号より十号迠臼杵許多。

赤羽根工作分局　十連鋳形三十、ラミノワール五、ヘルス三十、紙球切六、薬包長定器械三、雷粉締附器械五。

本廠鍛工四廠　火薬秤り器械三十五。

本廠鍛工三廠　玉切器械四十。

工作大学校内工作場　一号より十号迠臼杵許多。

本廠内仮銃工廠　一号より十号迠臼杵許多。

川口鋳物所　滾（こん）転車四、内二車は既に落成せり。

⑯No.99　5月19日

左の件、申上置及候也。

松橋　スナイドル弾薬は無数にして充分なり。四斤山砲弾薬は凡そ五十箱限り、但し一箱九発入、尤も残らず紙管弾なり。予備スナイドル銃百挺、同胴乱二百個。

右の四件は、たとえ迅速に陸行すと雖も、松橋に於て手当て相調う分。

隅田丸に積込みの内、要用の部

スナイドル銃凡そ三百挺、胴乱凡そ二百個、四斤山砲着発弾百四十箱。

右の外、喇叭、軍刀其他諸器械の属具、戦闘始め要用の分、悉皆隅田丸に積込みこれ有り候。陸行の節は必ず至急を要する分。

備考　海陸行未定なりと雖も要用の為め松橋迠取寄せ置、然る可く候はば御勘考の上御指揮を乞う。山砲弾、松橋にこれ有り分は悉く紙管弾なる故、着発弾の儀熊本へ懸合に及び候処、着発弾其外スナイドル銃等に至る迠現今有合これ無き趣、仍って一時の振替も相調難き由。且つ又松橋に於て砲弾渡しの儀も五十箱の余は差出候趣。右は昨日熊本、松橋の砲廠に於て談判の結果にこれ有り候也。

五月十九日　　山根中尉

⑰No.100　5月27日

五月二十七日　第二十二号　第四号弾薬製造の手続き并びに買入の事も郵便にて委しく御示し相成度旨申入れ置たる処、未だ御返事なし。此節は諸兵日々の戦争にて弾薬費高少なからず、此の先き甚だ懸念なり。素より御粗念これ無き義とは存ずれども、早々委しく御申越有たし。

西郷中将殿　　山縣参軍

ｆ．『火工教程』第一篇、第二篇

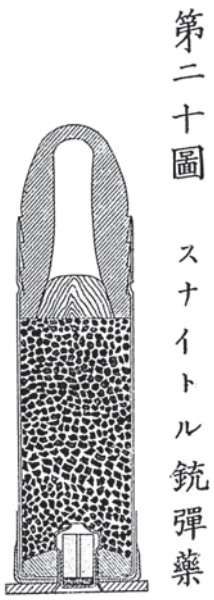
『火工教程』第一篇、第二篇陸軍省明治 17 年刊は、第一篇緒言にフランス火工教師の講演に基づいて、新刊の文献を参照し現行方法を修正補綴して作成した。これは、火工の技術は日進月歩であり、旧来技術を墨守すべき時ではないからである、とある。

本教程は火工（火薬爆薬にかかわる銃弾砲弾の製造）に関する事項が多種類の銃砲弾ごとに詳細に記述されており、明治 17 年刊行資料だが西南戦争時の銃砲弾製造の良い参考資料である。第一篇第六門小銃弾薬の部にスナイドル弾薬の組み立て製造などの記載があり、第二篇第一門にはスナイドル弾薬の材料の製造にかかわる記載がある。製造順としては第二篇が先で第一篇が後である。これらは、採集・出土小銃弾の多くを占めるスナイドル銃弾やその製造法の理解をより深めるのに有用なので掲載する。なお、内容が詳細かつ専門的なため、一部を省略しあるいは注釈を加えるなどして読みやすくするよう努めた。

(1) 第一篇　スナイドル弾薬調製

概　論

スナイドル弾薬（第イ図）は大別して三つの主要部分から構成されている。すなわち、鉛丸、雷管、薬莢である。鉛丸は鉛を素材として搾製・圧搾製造し、形は円堆卵形で、重量は 31.4 ｇ。鉛丸の底には直径 11㎜、深さ 10㎜ の円台孔があり木栓を挿入する。鉛丸表面には 4 本の圏溝を彫り、発射時の弾体膨張を助ける。雷管は銅で作り小盃形で、中に爆薬を充填する。



第イ図

薬莢は**管、扶莢、莢底、鉄円座**の四部で構成される。前三つはすべて黄銅製で、円座は鉄で製造する。管の内部は酸化を防ぐため仮漆（ワニス）を塗り薄葉紙を被せ、5 ｇの火薬を充填する。管の下端は中心に向かって折り曲げられ、扶莢がこれを包み込み、莢底も同様にこれを覆う。鉄円座は莢底の後面に接し、その中央に開けられた孔に雷管が固定される。雷管は扶莢と鉄円座の二つの孔を貫通し、薬莢内の紙製扁輪に固着され内部には雷砧（発火金）がある。このため撃針が雷管を打撃すると、爆発音が鳴り響き薬莢内の火薬に点火する。

これから、スナイドル弾薬の製造工程を詳述する。基本的に村田銃の弾薬と同じで、既成の諸材料を用いて弾薬を製造する方法である。各材料の尺度を一表に掲示する。左のとおり。（材料尺度表略）

雷管の填実および圧搾　工員 8 名（填実手 1 名、圧搾手 3 名、助手 4 名　材料と要具略以下同）

爆薬装填器（第ロ図）は概ね村田銃の雷管爆薬装填器と同様で、違いは磚壁（レンガ造）室内に設置せず、鉄製防垣で囲んで不慮の爆発を予防することである。

度量板は象牙板で作られ、隔壁外に露出している黄銅製桿Ａと発条（バネ）で連結されている。この桿を押すと発条が縮み定量の爆薬が雷管内に入り、桿を放すと漏口が閉じる。また、重錘Ｂは鉄桿Ｃの端に固定され、鉄桿を押し下げると、重錘が跳ね上がり漏箱は振動する。鉄板Ｄは保管板を受ける床を備え、鉄板の端は防垣外にあって、自由自在に動かすことができ、保管板を漏箱の真下に送り込むようになっている。

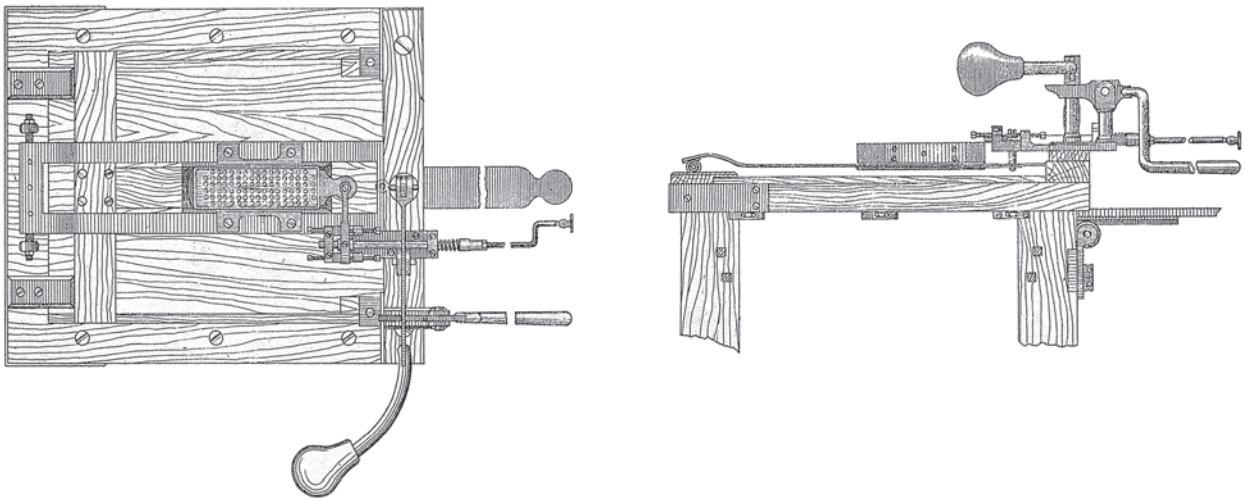
作業手順　助手は保管板に雷管を整置し、防垣の前に準備する。装填手はそれを取って鉄板の床上に置き、漏箱の真下に送り雷管を漏箱下板の孔に合わせ、右手で持ちながら左手親指を黄銅桿頭部に当て、掌で鉄桿を押し下げて漏箱を一度振動させる。さらに黄銅桿を押すと定量の爆薬が雷管中に入る。ここで鉄桿と黄銅桿を離して重錘と度量板を元位置に戻し、鉄板を出し保管板を外して机上に置く。

助手は机上にある保管板を取り、鵞毛（ガチョウの羽毛）で板面に付着した爆薬を払い、圧搾器のそばに置く。圧搾手はその上に連杵をかぶせ、全ての雷管に嵌合させる。さらに必要であれば竹ベラを使って

確実に嵌め込むようにする。圧搾手は左手で保管板の柄と連杵の柄を共にしっかりと握り、圧搾器の両鉄棍を回転させて保管板を間に挟む。これにより、爆薬は連杵によって圧縮され、雷管内に固定される。爆薬が十分に圧縮されると、その表面に光沢が現れる。圧搾が完了した雷管は、雷管の填実検査場に引き渡す。

成品は10時間で雷管への爆薬填実は約53,000～54,000個、圧搾は18,000～20,000個ほど可能である。

第二十一圖 爆薬裝填器



第ロ図

雷管の填実検査　工員1名

作業手順　工手は雷管を検査箱に入れ振動させる。この時、雷管はみな管底を下にして、箱内の孔中に入れ込む。ここで、雷管の填実（充填状態）の良否を検視し、圧搾十分のものは、雷管塗漆場へ送る。

雷管の塗漆　工員1名

作業手順　雷管を鉢に入れ仮漆（ワニス）を注入して、雷管全体に行き渡らせるために撹拌する。その後、漏斗に入れて余分な仮漆を滴下し、さらに紙を敷いた箱に移して再度動かし、仮漆が過剰に付着しないようにする。その後、別の箱に移して乾燥させる。この乾燥作業は通常日干しだが、晴天でも風があれば実施しない。

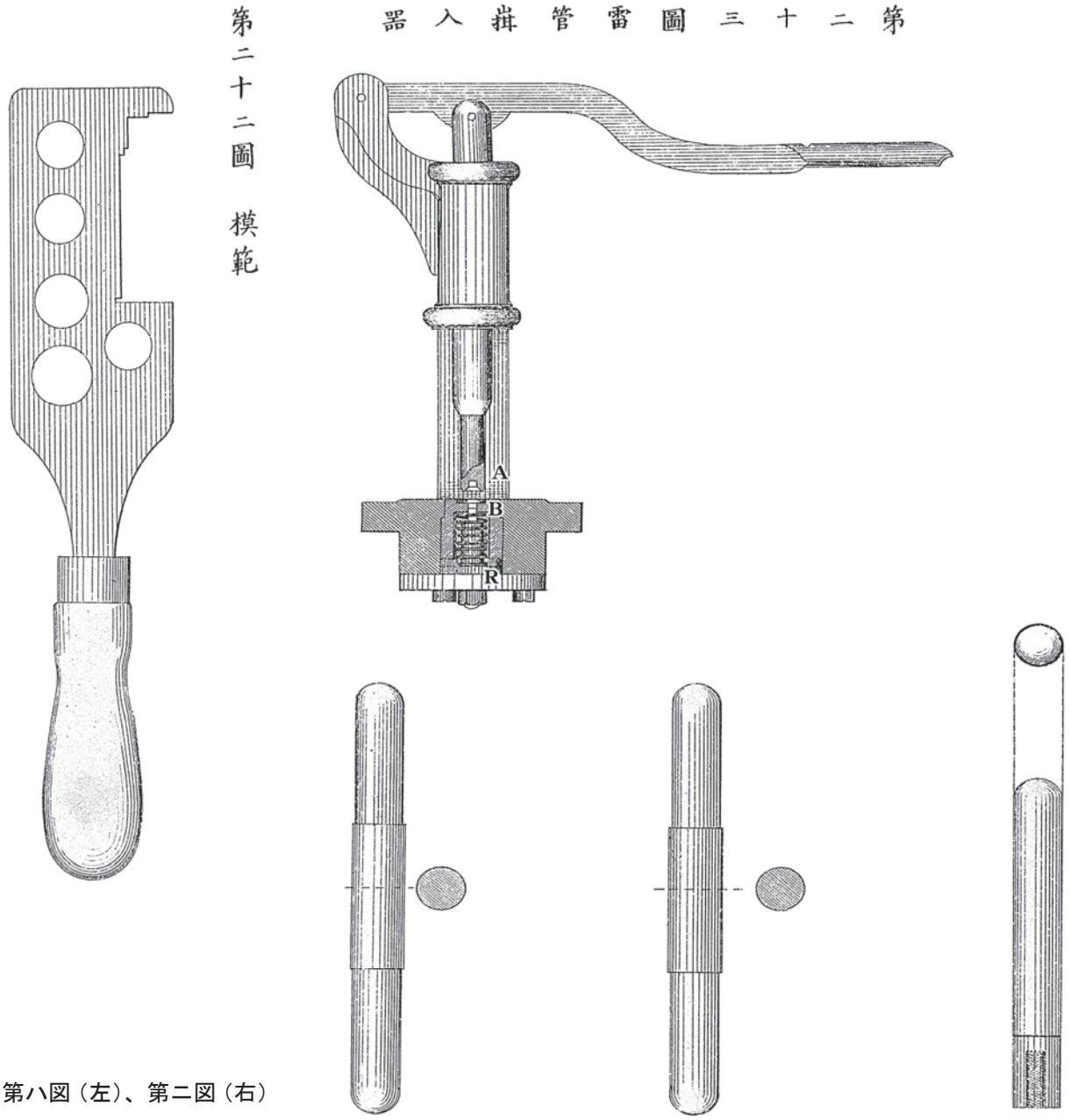
以上の作業が完了したら雷管は雷管嵌入場に送る。また、雷管の貯蔵の際には、1,000粒あるいは2,000粒が入る白鉄（亜鉛メッキ鋼板）製の筒に納め、粒数と製造年月を記載すべし。

薬莢の検査　工員2名

作業手順　1名の火工手は薬莢を手に取って、雷管室の火孔が完全にあいているか、鉄円座が密着しているか、防錆剤が剥がれていないか、その他の傷や欠陥がないかを検査する。もし鉄円座に着色がないものがあれば、仮漆（ワニス）を塗布し、他の火工手に渡す。その火工手は、模範（規格検査器、第ハ図）を使って鉄円座および薬莢の径や長さを検査し、良否を判断する。合格したものは雷管嵌入場に送る。

雷砧および雷管の嵌入　工員1名

雷管嵌入器（第ニ図）の装置は、直桿Aが鉄臂に連結され、操作に応じて上下動する仕組みである。直桿の下には臼があり、蛇線発条（バネ）Bによってその位置に固定され中には鉄臍Bがある。鉄臍は常に臼面と同じ高さにあるが、鉄臂を押し下げると直桿が降下して臼面を押し発条が縮み、臼が沈んで鉄臍の頭部が出る。



第ハ図（左）、第ニ図（右）

作業手順　工手はまず雷砧（発火金）を雷管に嵌め、嵌入器の臼にセットする。次に、薬莢の底を下にして直桿に挿入し、左手で保持しながら、右手で鉄臂を押し下げて直桿をおろすと雷管は薬莢内の雷管室に嵌入される。作業が完了したら鉄臂を離し、薬莢を取り出して箱に入れ再次検査場に送る。

成品は10時間で、約2,500～3,000個を嵌入可能である。

薬莢再次検査　工員1名

作業手順　工手は2、3個の薬莢をまとめて手に持ち、外観を検査する。特に雷管の底部が0.5mm以上没入していないかを詳細に調査し、問題がなければ火薬装填場に引き渡す。また、必要に応じて薬莢を庫内に格納する際は箱に収める。

薬莢はすでに一度検査を経たものであるが、再度の検査を行うのは蛇足にみえるかもしれない。しかし、全く遺漏がないこともなく、万一の事故を防ぐために再確認が必要なのである。

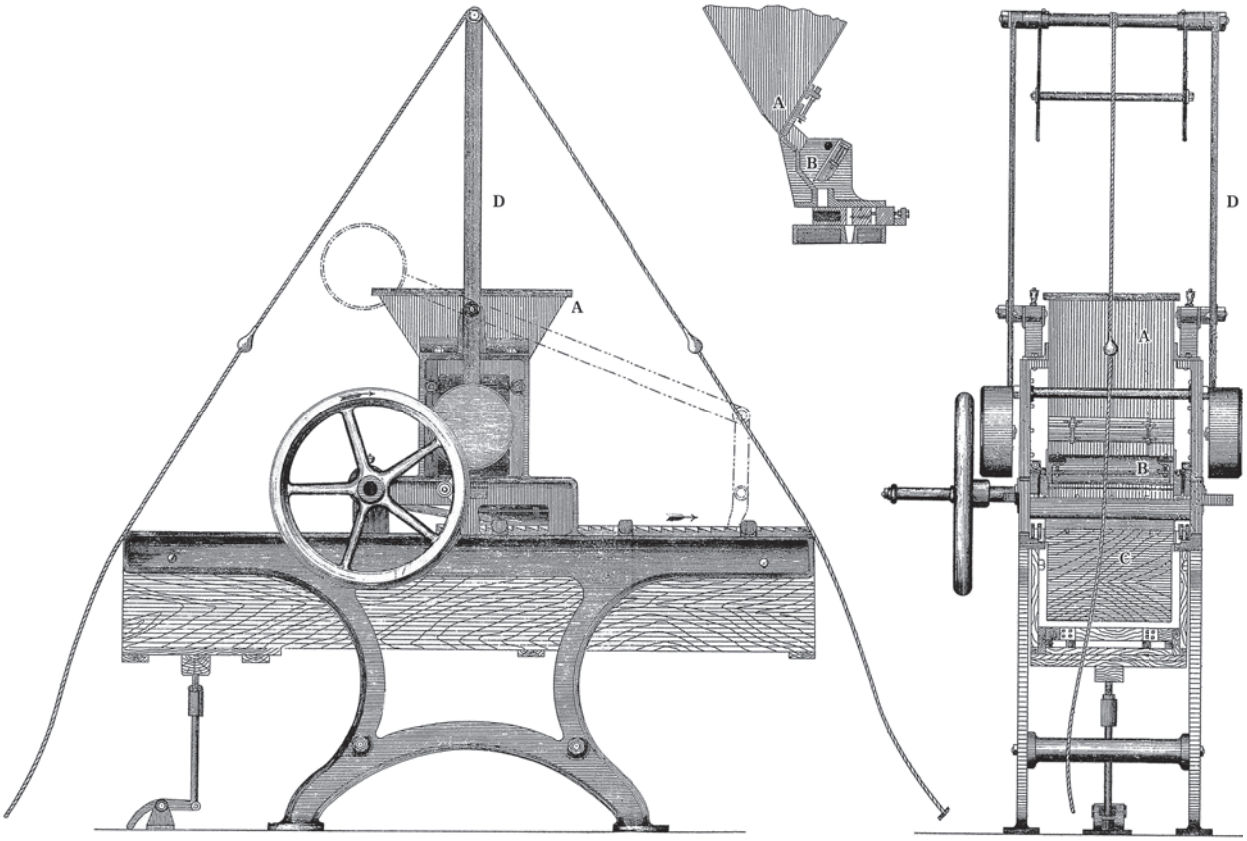
火薬の装填　工員２名（火工手、助手各１名）

火薬装填器（第ホ図）は、およそ長さ70cm、幅24cmの台上に深さ60cm、長さ44cm、幅24cmの箱があり、その中に火薬を入れる。箱底中央に一個の漏斗があり、火薬は長さ40cmの護謨管（ゴム管）を通って薬斗（第ヘ図）に送られる構造である。薬斗の上部には円筒Ａがあり、下部には定量の火薬を入れる円筒ＺとＺ’がある。これらは黄銅製円板Ｂに固定されており、取手で円板を回転させると、駐螺ｅで止まり、円筒Ｚが円筒Ａの下口に一致して火薬が入り、円筒Ｚ’が漏口Ｄに一致して火薬が薬莢内に流れ込む。

作業手順　助手は薬莢を箱中に整列させ装填器の近くに置く。工手は箱に約10kgの火薬を入れ、薬莢が並べられた箱を装填器の下に置く。左手で薬斗の柄を握り、右手で回手（ハンドル）を操作して漏口を偏隅の薬莢に合わせ、回手を半回転させると定量の火薬（5g）が薬莢に入る。次に漏口を二番目の薬莢に向け、回手を逆回転させて同様に火薬を装填する。箱内すべての薬莢に火薬を装填し終れば、鉛丸の嵌入場へ送る。

成品は10時間で、約8,000～10,000個を装填可能である。

第八十圖　火藥裝填器

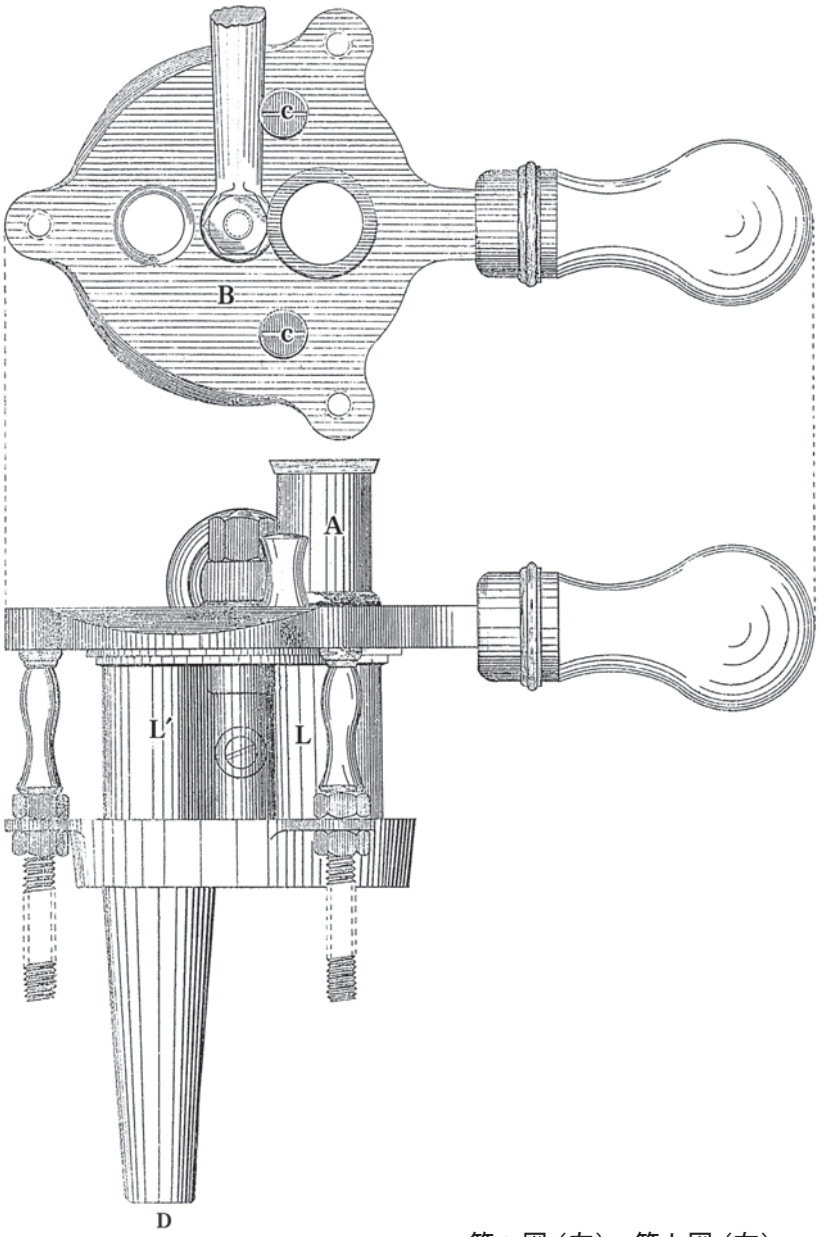


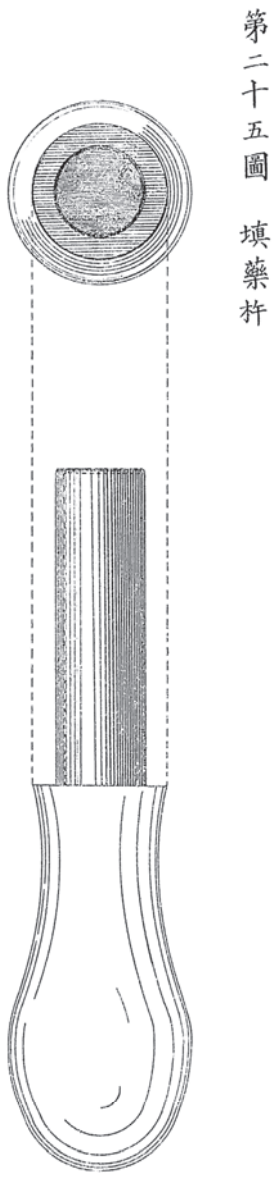
第ホ図

綿塞の填実および鉛丸の嵌入　工員１名

作業手順　工手は左手で薬莢を持ち、右手で填薬杵（第ト図）を持って、その柄で薬莢を軽く打ち、火薬を莢内に沈定させる。次に填薬杵で火薬を圧し、綿をまるめて小団子状にし再び填薬杵で詰め、さらに鉛丸を押し込んで圏溝の最も上の刻線に達したところで止める。この後、模範（規格検査器、第ハ図）で全長を確認し、合格したものは平箱に横に並べ、莢頭圧縮場に送る。

成品は10時間で、約1,400個の薬莢に綿塞及び鉛丸を嵌入可能である。





第ヘ図（左）、第ト図（右）

莢頭の圧縮　工員１名

莢頭圧縮器（第チ図）は、鉄箱Ａの中にＢ、Ｂ’の二つの模範がある。うち一つは牡螺（男ネジ）Ｒに、一つは箱に固定されている。両者を密接させると、その弧削部は一つの円形を形成する。また、規板Ｆがあり、ここに弾頭を密接させるための凹所が設けられている。

作業手順　工手は左手で薬莢を取り、右手で圧縮器の転把（ハンドル）を回して両模範を開く。弧削部に薬莢を挿入して弾頭を規板に密接させハンドルを逆回転させて模範を閉じ、莢頭を圧縮して鉛丸をその位置に固定する。作業後は箱に横に並べ製包場へ送る。

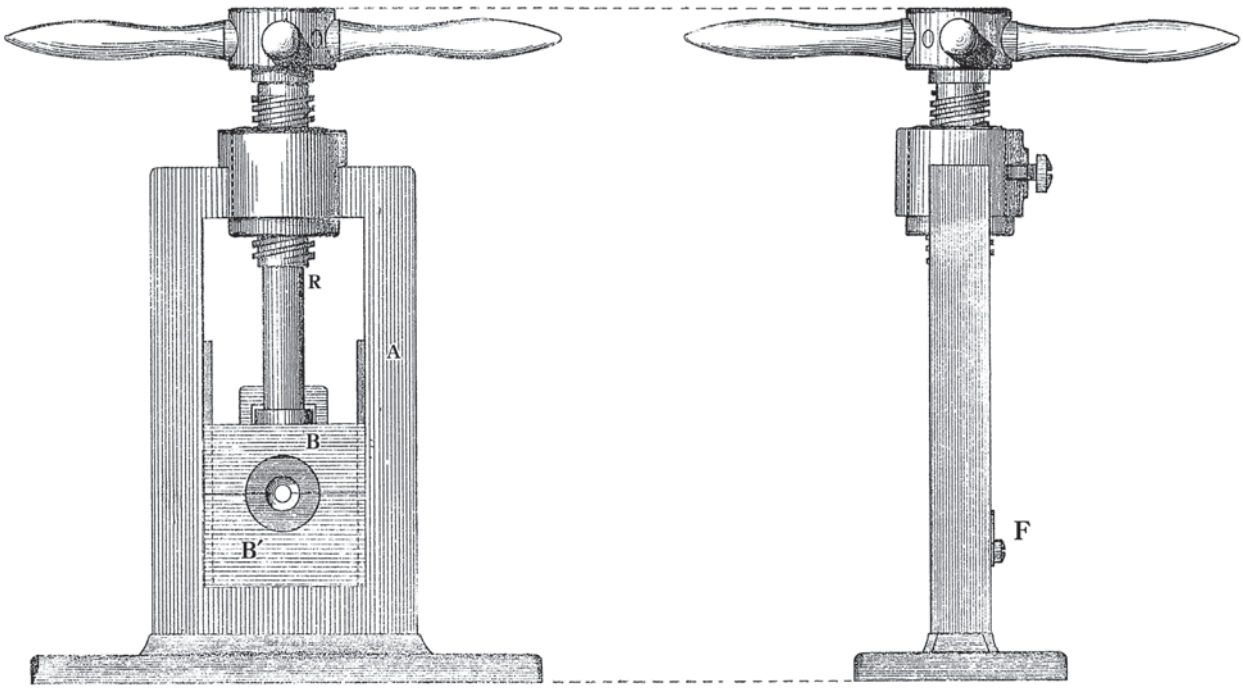
成品は 10 時間で、約 5,000 ～ 6,000 個を圧縮可能である。

弾薬包紙の裁断および捺印　工員２名

作業手順　鋏断器の規板を彎刀から 150 ㎜の位置に固定し、封紙を約 10 枚重ねて 4 つに横断して帯紙を作る。次に規板を 250㎜の位置に固定し、帯紙を二分すれば定尺の長方形紙ができる。この長方形紙を数十枚積み重ね、その中央に弾名、発数、製造年月、および製造所名を捺印し、製包場に送る。

成品は 10 時間で、約 6,700 枚の長方形紙を裁断、約 7,000 枚に捺印可能である。

第二十六圖筑頭壓縮器



第チ図

弾薬の封包　工員 1 名

作業手順　弾薬包紙は捺印した面を下にして机に置き、中央に 5 個の弾薬の弾頭を左右交互にならべ、次いでその上に 5 個の弾薬を下と弾頭を逆にして重ねる。これを左手でおさえ右手で手前の紙端を外に、外の紙端を手前に折ってから両端を折り麻糸で十字に結縛する。結目は可解直結とし、裏面の右端に置く。これで幅 80㎜、長さ 65㎜、厚さ 32㎜ の弾薬包ができる。

成品は 10 時間で、約 500 ～ 600 個を封包可能である。

弾薬箱の填実　工員 1 名

作業手順　弾薬箱には 50 包、つまり 500 発を収納する。方法は 4 包を重ねて箱の長辺に沿って 8 列 32 包を入れ余隅には 2 包を横に並べ箱の長さに合わせる。また、上層にも 2 包ずつを 8 列 16 包を横に並べる。隙間には紙屑を詰め、弾薬が箱の中で動かないようにする。

箱内に隙間があると、運搬時に思わぬ事故が生じる恐れがあるため十分な注意を払う必要がある。その後、回手轆轤に錐を取り付け、箱蓋に 6 孔を開け螺釘で固定し、蓋面に弾名、発数、製造年月を詳記して倉庫に格納する。

成品は 10 時間で約 20,000 個を填實可能である。

スナイドル銃弾 500 発入弾薬箱
（写真：淺川道夫氏提供）

(2) 第二篇　スナイドル銃弾薬材料製造

スナイドル銃弾薬の材料製造は四段階に分かれる。予業、薬莢の調整、装填、末業（封包）である。装填法と末業（封包）は第一篇ですでに細論しているので、ここには掲載しない。と冒頭に記されている。本篇の材料製造は作業工程が具体的かつ詳細に記載されており、工業技術史的には極めて有用であるが、遺跡採集・出土の薬莢や小銃弾の理解手段としては、やや主旨を異にするので目次のみの記載とし、図は略した。かわりに、製造工程の概要と、第一篇、第二篇もあわせて材料製造から封包までをイラスト化して示し、便に供することとする。

本資料によると、薬莢は銃弾に比して製造には極めて多くの工程があり、手間がかかることがわかる。加えて、スナイドル銃弾薬は工場で各種の機械を使用して製造するとはいえ、実態は1点ずつの手作りに等しく、戦地での膨大な数の要求にこたえることが困難であることも示している。なお、わかりやすくするため、記載順を逆にしたところがある。

予業－1（薬莢の製造）

管莢製作　管莢（薬筒）はおよそ厚さ0.25 ㎜、幅57 ㎜の黄銅薄葉を50 ㎜に截断し、装紙とともに丸めた外径16 ㎜の管である。

製作工程　第一業黄銅薄葉の軟過、第二業黄銅薄葉の塗漆、第三業黄銅薄葉の截断、第四業装紙の截断、第五業管莢の纏巻、第六業管莢の製作。

扶莢製作　扶莢（内底盞）は厚さ0.1 ㎜の黄銅薄葉を幅13.5 ㎜、長さ57 ㎜の長方形に截断し、底に一孔がある高さ10 ㎜の盞状（盃状）に製作するものである。

製作工程　第一業黄銅薄葉の軟過、第二業黄銅薄葉の截断、第三業の扶莢の纏巻。

莢底製作　莢底（底盞）は厚さ0.25 ㎜、幅28 ㎜の黄銅板を径16.7 ㎜、高さ5.6 ㎜の低帽状にし、その底部に径5.6 ㎜の一孔をあけたものである。ただし、その周縁は薄くする必要がある。もし厚ければ堅牢で火薬瓦斯（ガス）の圧力に抗すること甚だしく、管莢や扶莢を破裂させることがある。

これに反して底部はやや厚いほうが良い。もし、底部が薄すぎると火薬瓦斯の圧力に耐えられず全部たちまち破損し、小銃の閉鎖機までもが開くような大害をきたす。よって、示した定則に従って数次の試験を行うことが必須である。

製作工程　第一業黄銅円板の截断、第二業黄銅円板の軟過、第三業莢底の圧搾、第四業莢底の穿孔、第五業莢底の熱煮、第六業莢底の浸液および洗浄、第七業莢底の研磨。

鉄円座製作　鉄円座（抽筒板）は薬莢の基礎である。中心に径5 ㎜の一孔をあけ、酸化を防ぐために墨色にあぶり焼く。製作には厚さ1.3 ㎜、幅22 ㎜の鉄帯を使用する。

製作工程　第一業鉄円座の截断、第二業鉄円座の穿孔、第三業穿孔周囲の屈曲、第四業鉄円座の熱煮、第五業鉄円座の研磨、第六業鉄円座の染烘。

雷管室製作　雷管室は高さ9.7 ㎜、径5.6 ㎜、中に雷砧(発火金)と雷管を入れた要となるものである。製作は厚さ0.6 ㎜、幅18 ㎜の黄銅板を使用する。

製作工程　第一業黄銅円板の截断、第二業黄銅円板の軟過、第三業盞状体の搾造、第四業盞状体の軟過、第五業盞状体の浸液、第六業壺状体の圧搾、第七業壺状体の軟過、第八業壺状体の浸液、第九業起縁の圧搾、第十業雷管室の軟過、第十一業雷管室の浸液、第十二業雷管室の研磨。

雷管製作　雷管は盞状（盃状）で、中に雷粉（雷汞）を充填したものである。幅12 ㎜、厚さ0.3 ㎜の銅板で製作する。

製作工程　第一業銅円板の截断、第二業銅円板の軟過、第三業銅円板の浸液、第四業雷管の圧搾、第五業雷管の熱煮、第六業雷管の浸液、第七業雷管の研磨。

雷砧製作　雷砧（発火金）の役目は雷管の中にあって雷粉を発焼させることである。製作には径3.5

mmの断面十字形の黄銅線を用いる。

製作工程　第一業黄銅線の截断、第二業雷砧の熱煮、第三業雷砧の浸液。

複紙扁輪製作　扁輪は洋紙で製作し、内径6.5 mm 、高さ8 mmである。役割は雷管室の外周に沈没して薬莢の底部を固定することである。

製作工程　第一業紙管の製造、第二業紙管の干燥、第三業扁輪の截断。

薬莢の調整

薬莢底部の結合、工員1名、成品は10時間で約6,000個。**管莢に扶莢および扁輪の嵌入**、工員2名、成品は10時間で約1,000個の管(扶)莢を嵌入し、4,600～4,700個の扁輪を圧入。**底部および管莢の付着**、工員1名、成品は10時間で約2,000個～2,500個。**扁輪の槌圧**、工員1名、成品は10時間で約5,800個。**扁輪および雷管室の圧縮**、工員3名（主臼手、圧搾手、助手各1名)、成品は10時間で約2,500個あまりの薬莢を緊圧。**火口の穿孔**、工員1名、成品は第一号圧縮機で10時間に約12,500個の扁輪を圧縮、第二号圧縮機で10時間に約16,000個の雷管室を圧搾し、同時に底に穿孔できる。**薬莢の検査**、工員2名、第一編に細論したので、ここには記さないこととする。

予業－2（銃弾の製造）

鉛丸製作　鉛丸（スナイドル銃弾）は、直径14mm、高さ26.5mm、重量31.4gの円堆蛋形弾である。製造法は以前は鋳造だったが、内部に気泡痕が生じるなどの弊害があった。このため、現今では搾造法が用いられている。

製作工程　第一業鉛丸の鋳造（十連弾)、第二業鉛丸の断帯、第三業鉛丸の圧搾、第四業鉛丸の削底、第五業鉛丸の彫線、第六業鉛丸の検査、第七業鉛丸の塗蝋、第八業木栓の挿入。

第一業　鉛丸の鋳造　工員4名（組長、脱弾手、鋳弾手、助手（断帯手）各1名、材料と要具略以下同）

作業手順　鋳弾手は脱弾手と共に鉛を秤量し缶に投入する。断帯手は鉄工案（作業台）を炉のそばに準備し、十連弾鋳型を拭浄干燥後に案上に置く。この際、案に直角に型柄を炉の反対に向ける。缶中の鉛が溶解したら鋳弾手は干燥した鉛をつかんで缶に追加投入し逐次同じようにしていき、溶鉛が缶縁から8ないし10㎝に達したら、更に砕炭を鉛表面に撒き炭厚約2㎝にする。これは鉛の酸化を防ぐためである。その後、火力を強め白紙を溶鉛に投じ、紙が炭化し燃えたら加熱を止める。

組長は缶蓋の一部を開け、鋳弾手は杓子で鉛液を酌み十連弾鋳型の片側に注ぎ、脱弾手が型を反転させ反対側にも同様に鉛液を注入する。鉛液が型中で完全に固まれば脱弾手は槌打ちして型を開け、鈎で鉛丸を取り出したら型を閉じる。組長は初鋳の鋳造弾や製造不良弾を再び溶解させること。

第二業　鉛丸の断帯　工員4名（断帯手2名、検査手2名）

作業手順　鋏台は鋳型台と平行して少し離しておき、鋏台の孔中に鋏の曲がった柄をいれ、刃の部分が台の平行面に突出するように設置する。作業者は、右手で鋏の直柄を握り、左手で十連弾を持ち、その端を鋏の刃部に当て、第一弾から順に切断する。切断した弾丸は、台と箱の間に架けた厚紙桶を回転させて箱中に落とす。

検査手は、切断された鉛丸を別の場所に運び、一つ一つ検査する。外部に大きな傷や欠損があるもの、底部に凹みがあるもの、頭部に泡痕があるものは不良品として取り除く。良品と認められたものは圧搾場に送られ、不良品は再び溶解缶に投入して溶解される。

10時間で約30,000～35,000個を鋏断、検査可能。

第三業　鉛丸の圧搾　工員10名

圧搾機に備えられた臼杵は、その位置が極めて正確でなければならない。もし位置がずれると、不良鉛丸を圧搾し鋳造鉛丸と同様の弊害を生じる。よって、作業開始前に杵の尖った先端が、正確に臼杵の中心

を搗くか否か確認しなければならない。

工員は、右手で冠車の柄を握り、左手で一弾を取り逆さまにして臼の中に置く。冠車を回転させ、杵が弾底凹部の中心を搗き、弾丸が臼の中で支えられるようにする。杵で2～3回ほど打った後、冠車を再度回して杵を持ち上げると、臼内の活臍が上昇し弾丸を臼面に押し出す。このとき、弾丸は発条（バネ）によって前方の箱中に架けられた厚紙桶へ滑り落ちる。発条は一端に油壺を備え、弾丸を前方に送り出す際に杵の先端に少量の油を塗布する役割を果たす。

10時間で約18,000～20,000個を圧搾可能。

第四業　鉛丸の削底　工員6名

工員は左手に一弾を取り、鉛丸削底機の中心にある鉄桿Aに被せ、右手で鉄臂Bを軽く押し下げ真桿Cで弾頭を圧迫する。このとき、弾底は機械力で回転する鉈に接して、少し削り取られる。定寸に達すると、鉄臂は自動的に停止し、真桿はそれ以上圧力をかけないようになる。この段階で右手を離すと、鉄臂は発条（バネ）の力で真桿と共に上昇し、弾丸も発条の弾力によって機械から押し出される。その弾丸を取って箱に収め、次の弾丸を削底器に置き、同様の工程を繰り返す。

10時間で約18,000～20,000個を削底可能。

第五業　鉛丸の彫線　工員1名

作業手順　鉛丸彫線機（603頁参考図）の基盤上には円旋盤Ａがあり、蒸気の動力を受けるとすぐに回転を開始する。円旋盤の外周には鉛丸の刻線（圏溝）を作出するための四本の細溝がある。工手は送桶Ｂに数個の鉛丸を入れ、旋盤の周縁に沿わせて鉛丸を少し間をあけて一個ずつ押送する。円旋盤は絶えず回転しているので、鉛丸は回転に従って旋盤の縁を進み、しばらく巡って保盤の間を過ぎる。この時、鉛丸は両盤の間に挟まれ圧せられて円堆部に四本の細線が彫刻され、前方の木溝を伝って箱の中に落下する。

10時間で20,000～25,000個に彫線可能。

第六業　鉛丸の検査　工員2名

弾径検査器（中心孔径14.83㎜～14.7㎜）の臼中に鉛丸を置き、杵鉄臂で弾丸凹部を押すと鉛丸は臼孔を通って布道を伝い、回転しながら箱の中に落下する。

10時間で約20,000～25,000個を検査可能。

第七業　鉛丸の塗蝋　工員3名

1名の工手が疾炉の火を調整し、もう1名が黄蝋（ミツロウ）4.25kgと油0.75kgをそれぞれ別々に計量して鍋に入れ、炉で加熱する。あとの1名は鉛丸を鍋の近くに運搬する。黄蝋が完全に溶解した後、3名の工手が鍋の周囲に立ち、各自1発の鉛丸を手に取り、弾頭をつまんで最上線まで黄蝋に沈め、すぐに引き上げて平箱に並べる。

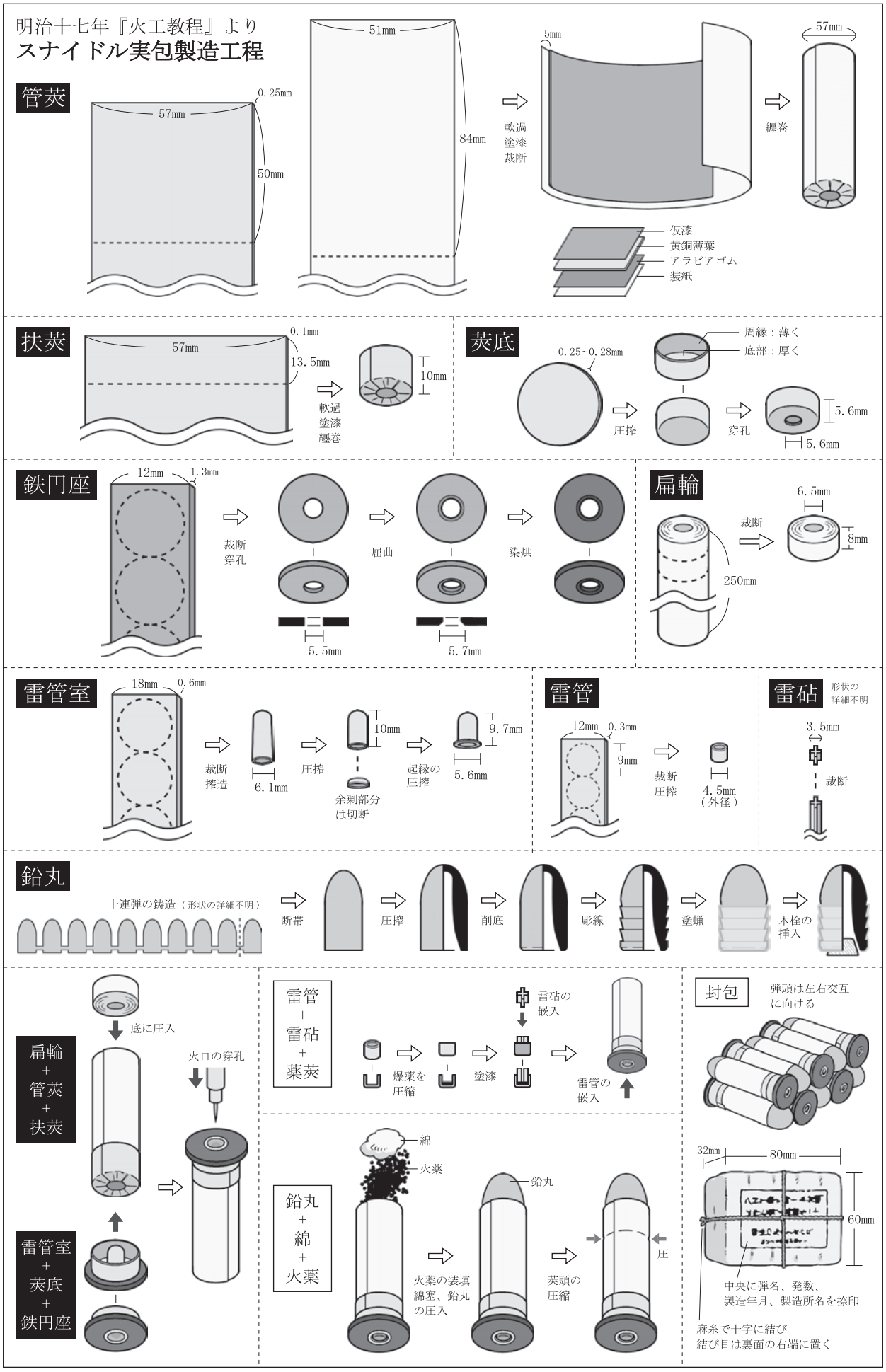
10時間で約18,000～20,000個を塗蝋可能。

第八業　木栓の挿入　工員4名

弾底の凹部に木栓を挿入し、その底面が斜めにならぬようきちんと平らに調整したのち平箱に並べる。

10時間で約20,000～22,000個を挿入可能。

『火工教程』第一篇、第二篇　明治17年10月陸軍省　国立公文書館デジタルアーカイブ（請求番号189-0161）

明治十七年『火工教程』より

スナイドル実包製造工程